
来る時代（とこ）間違え・・・でも・・・いやどうだろう？

元・配達人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

来る時代間違え・・・でも・・・いやどうだろう？

【Nコード】

N6549M

【作者名】

元・配達人

【あらすじ】

今度の世界は【恋姫世界】！

はい、またまたまた、アイツが主役です。更新はかなり不定期。

またハーレムになる感じで無双します。

やはり原作すごい覚え、ご都合、更には真のキャラがよくわからないので、二次及び某検索サイト頼みになる感じです。

相当に注意してそれでも、いいよ？な方はどうぞ！それが無理という方は戻るをした方がよろしいかと思えます。

序幕のような様子！（前書き）

前書き

•
つい、アッチも、ソッチも思い浮かばずにまたやってしまった・・

かなりうろ覚えな感じですので、注意してどうぞ。

序幕のような様子!

『ヒューン』

今日も元気に落下中、はいどうも!いつもの俺です。

鬼島 政成です。

いやあつくづく落下と縁があるよな俺?

何回目だ? まっいいけど。

『ズドオオン』

コチャコチャ考えてる間にも地面に着地。

「はてはて? パターンからいって、またかよ! まただよ! だらうなあ?」

フツ・・・すでにガッツリ慣れたものでした!

つうわけで、前方に見える、あの見るからに不幸なオーラと普通なオーラが漂っているアノ人に話し掛けてみるか? にしても不幸なオーラと普通なオーラって混在するんだなあ?

「オマエ何者だッ!!」

おう、シット! 先手を打たれた、まっいいけど。

「どうも、穴から落下で、こんばんわ鬼島 政成です、マサかマサナリと呼んでやってくれい」

ザックリ自己紹介にしても・・・コイツ、アレだな？コスプレ？腰に剣とか差しちゃって。

「きじま・・・まさなり・・・字は・・・名は・・・まさか・・・噂の・・・天の御使い!？」

はっ？天の御使い？いや、まあいいや？

「もしも？ブツブツ言ってつとこ悪いけど、オマエさんの名前は？今のところ、俺の中では普通子が有力だが？」

まさにピッタリ、佇まいからして、まさに普通子！

「誰が普通子だ！そんな変な名前なわけあるかッ！私は公孫賛だ」

ほうほう・・・なるほど

「ハム子な？」

「ハム子!!なんでハム子！」

いやさ

「なんかビビッときた、それにほらシツクリくるべ？」

「確かに何故か異常に馴染むけどそんなのはイヤだァ！普通に普通に通に！」

むむ、しゃあねえですなあ

「わあったよ、普通子！」

「そっちじゃないからアアア！公孫賛だからアアア」

うむ、実に面白し

「公孫賛絶好調〜！その調子で行こう」

ナイススマイルでサムズってみた。

「何がだアアア！」

公孫賛の叫びが夜空に響きわたった・・・

すつごくイイ感じですよ。

とコチャコチャありながらも

「なあ公孫賛や、ココ何処？俺は政成」

「ハアハアハア・・・此処？此処は幽州だ」

ほう、ゆうしゃう・・・幽州？アレ？

なんか聞いたことがあるような・・・ふむ・・・はて？

まっいいさね、とりあえず。

「公孫賛君、その恰好何？コスプレ？」

公孫賛の恰好にツツコミを入れることにした。

「こすぷれ？なんだそれは？」

あれま

「コスチュームプレー？だったと思われます、まあようするに、こ
う奇抜な恰好を楽しむ趣味的な感じ？ほら腰に剣なんか付けちゃっ
て」

いやまあ似合ってるっちゃあ似合ってるけどね？

「はあ？何を言ってるんだ？コノ時代、剣ぐらい珍しいものじゃな
いだろ？」

はっ？待て・・・待て待て・・・ふむ・・・

「公孫賛君・・・もう一つ、今っていつ？つうか剣を下げるのが普
通の時代ってどういうこと？」

まあ薄々は感づいてますが・・・

「今は戦乱の時代だぞ？最近ではカクカクシカジカ」

なるほど・・・なるほど、ン？違うから、詳しくわかんなかった
からごまかしたとかそんなんじゃないから！

信じれ！

つと今はメタなアレは置いておき

「三国志？アイタタタ〜穴から落ちたら三国志？いやぁマジかぁ・
・まっいいさね」

「ン？何をブツブツ言ってるんだ？」

おっとどうやら口に出てたみたいですね。

「いやさ、チクツと時間旅行を経験しただけ」

「はっ？時間旅行？まっまあいい、オマエ、確かマサでいいって言ったよな？空から降ってきたけど天の御使いなのか？」

ホワツツ？天の御使い？そーいやさっきもんなこと言っとりましてが？

「なんじゃそら？」

「知らないのか？天の御使いっていうのはカクカクシカジカ」

ほうほう、ン？だから違うってマジで！ごまかしてねえつつってんでしょ！

信じれ！

つとイカンイカン。

「残念ながら違いますなあ、強いて言うならバグキャラさ」

「ばぐきやら？なんだそれ？」

むむ・・・

「なんで日本語通じるのに横文字はダメなんだ？」

「触れるなそこは！！」

どうやら触れたらいけない部分らしい、実は俺もそう思う、みんなも触れたらダメだぞ？マサさんとの約束だ！

つと

「バグキャラつうのはアレだ・・・ふむ・・・公孫賛君、その剣で攻撃してみ？」

実践すのが早いと思いそう言ってみる

「はっ？危ないだろ？」

むう、公孫賛、常識人。

「いいから、いいからマサさん信じれ」

「ああ~~~~わかったから！避けろよッシッ！！」

『ヒュッ』

うむ、それでよしと、ではではお馴染み

「素手バリアアア」

『ガキン!!』

「はああ!?! なつ、素手! ちょ素手!?!」

うむ、いい驚きっぷり! 今までの中でもトップクラスの驚きっぷりだな? ナイスリアクション。

「とまあこんな具合にちよつくら常識の斜め上あたりにいるのがバグキャラです、まあ規格外ってやつ?」

「ハッハハ・・・なるほどな・・・ばぐきゃら・・・規格外・・・
とんでもないな? 天の国のやつらはみんなそんな奴らばかりなのか
?」

いやいや。

「んなわけないやん、俺みたいなのがゴロゴロいたらもう大変なことになるよ?」

「だろうな?」

だろうなって・・・公孫賛さん・・・だろうなって・・・その目アレだよな? 完全にアレだよな? こう能力的な意味じゃなくて性格的な意味で、『だろうな』

だよな?

まっ慣れてるけどね！

「あっそうだ、マサ、オマエ、空から降ってきたよな？住むところとかのアテはあるのか？なんだったら着いてくるか？」

おう？

「マジで？いいの？」

「ああ、まあこのまま、ほって置くのはちょっとな」

あら、やだ公孫賛さん

「公孫賛、めっさいいやっ！」

普通って言ってごめんね？もう俺の中での公孫賛の株価は急上昇！

「いや・・・いい奴って程じゃないって、普通だ普通」

おう？

「照れなさんなっば、それを『普通』と言い切るのがいい奴ってこった！」

もうアレだね、普通を越えた、超普通だね！アレ？コレなんか違うようない？っておよう？

「ツッ！？」

赤！赤・公孫賛？うむ・・・可愛いッス。

「撫でまゝす、可愛いから」

「ツツツ~~~~!!?」

更に赤くなった、けど撫でました。

だって可愛いからね！

・
・
・
・

で、それから公孫賛に案内されて、やって来ましたのは

「城？マジ城？」

城でした、予想外でゝす

どうやら公孫賛さん、結構凄い人っぽい、何やら県令とやらをや
つとるそうです。

まっお偉いさんだろうが公孫賛がいいやつなのには変わりなし！

「で、マサはコレからどうするんだ？」

おっとコチャコチャ考えてたならば、公孫賛にそう聞かれました、
ふむ・・・どうするかね？

「仕事くんろ？」

大工とか、料理人とか、後は戦闘要員とかで」

「ばらばらだな・・・まあそれくらいなら何とかなるけど、けど戦いは・・・まっアレだけ頑丈なら・・・大丈夫か？」

うむ、大丈夫大丈夫！

つうわけで、仕事も決まったし、ミ○ミ○でも飲みかねえ？

『ピッ！チャリッ！』

宇宙っ子が作った発明品、『デダイヤル（改）』にてミ○ミ○を取り出します。

ちなみに何故に改かと申しますと、なんとコレ、金及び金っぽいものを入れるとミ○ミ○を無限に出してくれる、というスペシャルな一品なのだ！

宇宙っ子の発明品の中でも最高の発明だと思うぞ！

まあぶっちゃけ自販機だけど？

アン？ご都合？知るか！精一杯なんだよコレで！ほっといたげて！

っとアレな発言は置いておいて

「飲むか？」

公孫賛にも勿論すすめまする。

「なっいつ今のなんだ？妖術か？」

妖術ってオマエ？妖術って・・・まあ確かにコレ、完全にオーバーテクノロジーですけどね？俺らがいたところでもオーバーだったしね？っと説明せなな？

「妖術ちゃうからな？ふむ・・・どう言ったもんかねえ・・・アレだな簡単に言えば便利な道具だ？で出したんは、すんげえ美味い飲みもんだ、つうわけで飲め！」

「てっ・・・天の国っていうのは不思議な道具があるんだな？」

いや天の国じゃねえけどな？でもまあなんとか納得したようです。

でミ〇ミ〇をおっかなびっくりしながらも飲み始める、公孫賛、すんげえ可愛いッス。

「ンッン・・・あっ・・・美味しい」

フッ・・・流石はミ〇ミ〇その美味さは時代を越えるぜ！

「ッ~~~~」

そして俺の手はやはり公孫賛の頭に乗ってるんだぜ！

だって可愛いからね？そして嬉しいからね？

で、それから、公孫賛に俺がバグな理由を聞かれたんで、とりあえず【ジジイエピソード〜ジャングル編〜】（詳しくは本編以下略）を話し

「こんなジジイの育てられたら、こうなった」

って締めたら

「大変だったんだな・・・コレ・・・」

つってお茶を渡された、ミ〇ミ〇あったけど、その温かい気持ち
が嬉しかったんで、勿論飲んだ、ただ妙にしょっぱく感じました。

・ ・ ・

〜公孫賛 視点〜

マサを宛がった部屋に案内し、私は自分の部屋に戻り一息つく。

「変なやつだったよな〜？」

寝台に横になりつつ独り言

最初は天の御使いかと思ったが、マサが言うには違うらしい、マサが来たのは未来だと言っていた。

よくはわからないけど、あまりに気にしないことにした、という
よりマサと話していたらどうでもよくなってきたというのが正解だ

ろうな？

寧ろマサの爺さんの話しのほうが余程トンデモなかったし。

マサはその爺さんとは血が繋がっていないみたいだが、マサの顔は自慢の家族を話してる子供のそれだった。

口では、クソジジイ！とか言ってたけどな？

ハハ・・・まあ同じ目には遭いたいとは思わないけど。

マサ・・・天の御使いじゃなくて、マサいわく、ばぐきやら。

普通ならあんな怪しいやつ、もっと警戒するべきなんだけど

私はハッキリ言って、マサの事を気にいってる、立場なんか気にしないで対等な感じがしたし。

それに・・・

「可愛って・・・言われたの・・・始めてだし・・・」

正直嬉しかったんだよな？世辞とかじゃなさそうだし。

まあ普通とかハムとか余計な事も言うけどな？

それにしても・・・ハムってなんだ？

「明日にでも聞いてみるか？」

そう呟いて、今日は寝ることにした。

序幕のような様子！（後書き）

後書き

番外の流れと同じでした。

後、ご都合道具が登場！

まあミ○ミ○しか出ませんが・・・

こんな感じになってますが、ポツポツとやっていきますので、よろしければ、また見てやってください。

感想などありましたら是非に

第一幕のような様子! (前書き)

前書き

ええ微妙な感じやも?

でも頑張りました。

しかし、やはり、心を強く持ちつつどうぞ。

第一幕のような様子!

「朝~~~~!!」

はい朝です、うむ今日も良い天気ですなあ?

さて朝メシを・・・ってもうた・・・

「キッチン何処かわからん?」

はて、どうしたもんか?

「ン? 早いなマサ?」

おっいいところに公孫賛!

「おは! キッチン・・・じゃなかった、えっとメシ作るところ調理場? って何処?」

いやぁ横文字通じねえって以外と不便だな? 今度コツコツ教えこもう

「ン? マサが作るのか? ってそういえば昨日、料理人が、とかも言ってたな? じゃ案内するからついて来てくれ」

「あいよ!」

と公孫賛に案内されて、調理場へ

「俺調理中」

はい完成！なんか和風っポイ感じに、焼き魚に、タマゴ焼きに、ご飯にみそ汁です、いやぁ材料あったんだとか、そんなツツコミは無しの方向で、お願いします！

「うっ美味しいな？この汁も初めての飲むけど」

「そうかい、そうかい？嬉しいねえ、あっコレは、みそ汁ってんだ、俺がいた所じゃ定番のやつだな？」

「ようするに天の国の料理か？」

「天の国じゃねえつつってんだろ！つか、天の国ってなんかアレだぞ？なんかアノ世みたいでなんかアレだから、やめれ？」

まあ一回行った、もしくは逝ったことあるけど。

「言われてみれば確かに、じゃ何て言えばいいんだ？」

ふむ・・・まあ日本？いや、ちよっと捻って

「ジパングだ！黄金の国ジパング！」

「おっ黄金!？」

おう？やっぱ、そこに食いつくか？まあ

「半分冗談！昔は外国からあそう言われてたらしいけどな？詳しくは知らん、今は日本だ！」

「はっはあ？つまり、日本っていう国ってことか？」

「そっそ！まあ未来？のだけどな？」

「なるほど」

とこんな感じで朝メシは過ぎていき

「ヒマ！なんか仕事ないの？」

「それじゃまずは街の案内だな？そのうち、街の警邏とかもしてみようつもりだし」

ふむ

「じゃそれで、早速いきまっしよい！」

「ああ」

とこうして街に出ることに、にしても・・・

「公孫賛、城から出てなんとも言われねえの？普通は偉いさんってなんかコチャコチャめんどくさえ感じのがあんじゃねえの？」

「ン？ああ、私の所は、特にそんな規則みたいのはないよ？めんどくさいし？」

おう！剛毅なこって？まあ、そっちのが楽でいいやね？（書いてる人的にも）

ン？なんか、過ぎった？いやスルーで！

「安いよ、安いよ」

「オヤジ！それくれ！」

「あいよッ！」

ふむ！

「活気あんなあ？なんか下町って感じで、マサさんこういう雰囲気は好きだぜい！」

公孫賛の人のよさってのが出てるって感じ？あっちなみに、俺的な解釈では、県令ってなあ都知事とか？県知事とか、そんな感じの認識、まあ多分、概ねあってるはず！多分！

「そっそうか？なんか、そう言ってもらえると大守として嬉しいな？」

公孫賛、若干照れながらも、嬉しそう！

自慢の街ってやつだな？、なんか俺まだ嬉しくなっちまわあな？

『ガシヤァン！』

「オラァァ！この店は客にこんなマズイもんを出すのかあ？」

「アニキは味に煩いからなあ・・・ゲハハ！」

「けっ・・・けっこう美味しいとおっ思うんだ」

「デクは黙ってる！ンッン・・・こんなクソマズイもん出されて俺は傷ついたぜえ」

チッ・・・せっかく気分よく街を見て回ってたつつうのによ？

「一仕事してくっか？」

「悪いなマサ・・・でも大丈夫か？」

「なんで謝ってんだっつの？まああんなチンピラどもにやられるマサさんじゃねえんですよ？じゃ行ってくらあ！」

つうわけで現場にGO！

「かつカンベンして下さい！」

「アン？俺は傷ついてるんだぜ？けど・・・まあ誠意ってやつを見せてくれるっていうだったら考えてやるぜ？」

「流石はアニキ！心が広え！」

「そっそそ、そうだな・・・でもやっぱり美味しいと思うんだな」

ふむ・・・

『ヒョイ、パクッ』

近場の皿から一掴み、うむ・・・

「中々美味えじゃねえか？ オツチャン！ コレ一皿くれい！」

「えっあっアンタ誰だ？ って今はそれどころじゃ！」

ふむ・・・確かに、じゃ

「おらテメエら？ このメシ美味えよな？ 何因縁吹っ掛けてんだコラ？ つかアレなの？ 味がわかんねえくらいに舌がバカになってんの？ そこのデブいのは味はわかるみてえだけど？」

クルツとチンピラ三人に向き直りそう指摘。いきなり暴力は振るわない、紳士だぞ俺！ まあ正直不意打ちで、ブッ飛ばしてもよかったけど。

「テメエ誰だ？ 生意気な？」

「ン？ 通りすがりの警備員でい！ つか質問に質問で返すなバーカ！」

紳士だぞ俺！

「アニキ！ このガキ！ アニキのことナメてますぜ！」

「チビにガキ扱いされたくねえわ、どチビがッ！ つかオマエの方がガキじゃね？ 身長的な意味で？ でも顔はオッサンだな？ キツッ！」

うむうむ紳士紳士！

「なっとななな！ テメエ！ 人が気にしてることをッ！」

どうやら気にしてたらしい、怒りだしたし？むう？

「俺、紳士だったのに？」

「おっお客さん、おっ怒らしちゃヤバイですよ！」

ン？

「あっアニキ！この生意気なやつ殺っちゃって下さいよ！」

「ああ世間ってやつを教えてやる必要があるなあ？」

『スラッ』

「あわわわ」

ふむ、なんか剣を抜いたな？オッチャン、あわわ、ってなっとなるし？つか、うん

『ゴキゴキン！』

クビを回しつつ指を鳴らし。

「逆だ逆！教えんなあ俺だボケ共？」

教育開始！

・
・
・

・
「あっあひる・・・」

「いいだい・・・」

「うう・・・」

はい終了！『素手バリア』もせずに、サクッとボツコボコにしました。

「お客さん、ありがとうございます、コレ代金はいらないで！」

「兄ちゃん強えな！」

「すげえぞ兄ちゃん！」

メシ屋前ではヤンヤ、ヤンヤの盛り上がり。

「マサ、お疲れ」

おっと、公孫賛から、労いのお言葉、まあ

「全然疲れてねえけどな？でコイツらどうする？埋める？吊す？沈める？」

ビツと三人バカを指差しながら相談、まあ半分くらいは脅しです。

「うーん、とりあえずは牢に叩きこんどくか？」

ふーん、ツツコミ無しか・・・ちと淋しいじゃないか、チクソウ・

・・・とか思いつつも

「じゃ牢に入れる前に・・・おうテメエら？店を荒らした後始末だ！手伝えオラッ！」

『ドスッ、ドスッ、ドスッ！』

蹴りをぶっこんでたたき起こし、店を補修で

「オラッ食え！」

三バカにゴチする、あっちなみに俺、公孫賛から小遣い程度には給料を前払いで貰ってます。

「いいいいのか」

ン？

「働いたらメシが食えんだ！コレ常識！」

まあ一応、教育つつたしな？

『ガツガツガツ！』

うむ、一心不乱に食ってるな？働いたから腹も減るわなあ？どれ

「マズイか？」

「ブンブン・・・美味え・・・」

「アニキ、美味しいッス！美味しいッスよアニキ！」

「やっぱり美味しいんだな」

フツ・・・

「なんで美味いかわかるか？オツチャンのメシも美味えってのある、けどな、それだけじゃねえ、ちゃんとして働いて食ったメシはな？美味えんだよ？」

少なくとも俺は？

「「「コクコク」」」

うむ、まあさっきは大分、アレな扱いしたけど、なんやかんやで話さばわかるってことかねえ？

「じゃ暫く牢で反省して、今みたいに美味しいメシを食え？どうせ食うなら美味しいメシ！いいな？次にこんなアホなマネはすんなよ？」

「「「コクコク」」」

うむうむ、コレでよし！じゃ

「公孫賛さんや？」

「あつああ・・・連れていけ」

「「「ハッ！」」」

『バツ!』

公孫賛の掛け声で、三人組、グルグルに縛られ連行。

「コレにてエエ一件ン落着ウウ〜〜!」

ベンベン! って効果音が聞こえんばかりな感じでバシツと宣言。

「「「ワアアア! いいぞ〜〜兄ちゃん! 感動したアアア!」」」

またもや、ヤンヤ、ヤンヤの盛り上がり

「では、御隠居行きましょう!」

「誰だよ御隠居って! 公孫賛だからッ!」

いやあつついっ!

で、それから、街を回ってると

「兄ちゃんさっきの見てたぜ! コレ食いなッ! 大守さまもどうぞ! 食べて下さい!」

「おっあんがとさん!」

「ああありがとう、私なんかついぞばいけど・・・」

『スッ』

「アハハ・・・そんなことないですよ大守さま」

「目、反らしてないか？」

って感じで肉まんを貰ったり

「腕っ節も強えけど、大工としても凄えな兄ちゃん、今度、ワシの所で働かんか？」

「ン？手伝いくらいならな？悪いけどもう仕事決まってるんだわ？」

「おっ大守さまの夫か？」

「ばっ！そっそんなんじゃないって！！」

「そっそ、オツチャン頭大丈夫？」

「・・・こりゃ～～大変そうですねあ大守さま？」

「だから、そんなんじゃない・・・けど・・・少しくらいはさ・・・」

「何イジケてんだ？」

大工に勧誘されて、その後、何故か公孫賛が落ち込んだり。

「ぴっちゃ～振りかぶって投げた～」

『カキン！』

「わあゝ回れ、回れゝ」

「ばっくほゝむ！」

『ズザッ！』

「「にっ兄ちゃん！どっち？」」

ふむ・・・

「セーーーーフッ！！」

「やったあサヨナラだアアア！」

「「ワアア！」」

「うっう・・・チクショゝゝゝ」

「次は勝とうぜ！」

とチビっ子達に野球を教えこみ、審判やったり

「えっと今のって何がどうなって勝ち負けが決まるんだ？」

チビっ子達に反して、今だにルールがわからないっぽい、公孫賛

「カクカクシカジカってやつだ？やりながらすりやあすぐ覚えんだけどな？よしッチビっ子共！次は公孫賛も参加すんぜい！」

「ちょ待てって！」

「いいからいいから！ほれチビっ子達を見てみる？」

「大守さまも、するんだ！わぁーい！」

「大守さまは俺の、ちーむだぞ！」

「ボク達だぞ！」

うむうむ、公孫賛、大人気！

「なっ？チビっ子達も一緒にやりたいだど？」

「ああもう、仕方ない！コラ、喧嘩するな！私はさっき負けた、ちーむ？だったか？に入るからな！」

「「「ええええええ」」」

「「「やったー！」」」

と結局、公孫賛も交じってチビっ子達と野球したりして

日が暮れてきたので

「じゃあなチビっ子共？次は別の遊びを教えてやる！」

「ホント？わぁーい！」

「じゃーね？兄ちゃん、大守さま！」

「また遊ぼうね」

とチビっ子達と別れ、俺達も城へと戻ります。

「楽しかったな？」

「ああ、やきゅう、だったか？やってみると面白いな？よし、次は、
ぴっちゃーって奴をやってみよう！」

うむうむ、公孫賛も随分と楽しんだようだな？

「って結局、案内じゃなくて遊んでただけになったような？」

「いんじゃないね？街ん様子も大体わあったし？それに楽しかったし？」

「そうか？ならいいけどな？」

とこんな感じで話しながら城に帰りました。

で、晩メシ作って、またまた公孫賛ともしゃもしゃ食べつつ

「明日もこんな感じか？」

明日の予定を確認

「いや・・・さっき確認したんだけど、最近、盗賊が出るらしいんだ、その討伐だな」

盗賊ねえ？

「物騒なこって？よしや、じゃ明日あサクツと盗賊共をブツ飛ばすかねえ？」

「軽いな？マサ？」

「まあ似たようこたあしたことあるからな？」

はい、例によって武装ゲリラとか、マフィアとか、他色々。

「ああ昨日話してたマサの爺さん関係か？」

「7割な？」

「自分から動いたのもあるのかよッ！」

ナイスツツコミをいただきつつ、晩メシ終了、で就寝。

・
・
・
・

で翌日！

「アレが盗賊か？」

盗賊のアジトが見える位置にて公孫賛に確認。

「ああ、けどホントに一人で行く気か？」

はい、実は、一人で行くってことにしてます、まあいったやなん

だけんど、一人の方が気楽だしね？それに

「大人数相手にすんなあ慣れてんだわ？つか味方いたら巻き込まれ
っから？危ねえし？」

まあタイマンの方が慣れてんだけどね？

「そうか？まあマサがそう言うんだたら・・・でも危なくなつた
ら私達も行くからな？」

フツ・・・

「悪いな？出番はねえよ？じゃ行つてくらあ？」

公孫賛に、そう言い残して

『シュバツ！』

N I N J Aで空中に舞い上がり、盗賊団の中心目掛けて~~~~

「晴れ時々~~~~」

『ヒューーン』

「なっなんだ今声が聞こえなかったか？」

「空耳だろ？」

ニヤリ、空耳じゃねえよ？

「俺エエエツ!!」

『ズドオオオン!!』

「うわああ! なったんだ?」

「敵か?」

フツ・・・

「当たりだオラァァ!」

『ズドッ!』

「げぶう~~~~!」

『ヒューーン、ズガァン』

「」「ぐああ!?」「」

喧嘩キックで目の前の盗賊Bをブツ飛ばし、回りの奴らも巻き添いにする。

「さて? テメエら? 盗賊なんて、だっせえマネしくさりやがって・
・ブツ飛ばしてやるよ?」

『ゴキゴキン!』

いつものようにクビを回しつつ指をならし、宣言。

「なっ なっ・・・ たった一人で!? ナメやがって! 野郎共やっちま
エエエ!」

「「「オオオオオ!!」」」

ハッ!! じゃ暴れるとしますか?

・
・
・
・

公孫賛 視点

『ズドッ!』

「ギャアアア!」

「なっ なんだアイツ! 槍が刺さらねえ!」

「バグキヤラだからよッ! オラッ!」

『ズドオオオ!』

「「「ギャアアア!」」」

こっ コレは・・・

「凄いな・・・ マサのやつ・・・」

千以上の数をたった一人で、しかも、短時間で7割以上は倒して

いる

『ガシッ!』

「人間~~~~ボーリングッ!!」

『ブオン!ガコンガコンガコン!!』

「「「ギャアアアア」」「」」

「ハッハッハア!ストライク!さあ次はどいつだアアア?ってあら?」

マサ・・・今の人間ボーリング?ってやつもう終わってるぞ?

本気でマサのやつ

「とんでもないな?まさに、ばぐきやら」

マサに教えてもらった、言葉、規格外という意味らしい、後他にも、色々教えてもらった。

「もう終わりかよ?手応えねえなオイ?オラ、テメエら!正座アアア!」

「「「はっはいッ!!」」」

ン?考えこととしてたらマサのやつが盗賊団を全員正座さしてる、昨日みたいに説教するんだろうか?

「テメエらは男か？それとも漢か？」

「いった意味が・・・」

「ええい！盗賊B齒を食いしばれイイイ！」

『ズバンッ！』

「ガハア~~~~」

いや今のは私にも意味がわからないぞ？

「いいかぁ！漢はなあ、カッコつけてナンボだろ！鏡に写る自分を見てみる！どいつもコイツもしよぼつくれた顔しやがって！カッコ悪いと思わねえのかッ！」

なんだそれは？

「ハッ！」

「おっ俺達は・・・」

「なっなんて情けない顔を・・・」

通じるのかよッ！！

「フッ・・・なあに、今からだって遅くねえ！テメエら自身がやってきた罪ん洗いながし、まっさら気持ちで、真の漢への道を歩きだすだ、今、この場所から！」

「おっ俺達が・・・」

「真の漢に・・・」

「なっなれるのか？」

もうなんかついていけないんだが？

「フッ・・・なれる、なれないじゃねえ！なるんだ！」

「やる！俺はやるぞ！」

「俺もだ！」

「「「ウォ~~~~」」」

すっ凄い盛り上がってるな？全然ついてはいけないけど・・・

「じゃ俺あオマエらのクビが飛ばねえよう、便宜をはかってくらあ、ココまでは手を貸すが、そっから先はオマエら次第だぜ？」

「まっ待ってくれ！あっアンタの名前は！」

「鬼島 政成だ、マサかマサナリと呼びな？」

「マサナリ・・・」

「「「ウォオオオオ、マ〜サナリ！マ〜サナリ！」」」

ってオイオイ！

「マサ、オマエ何やってるだ？」

「まあちいと漢の道とやらを？意外とノリ良い奴らだわ？でだ？公孫贇」

ハア~~~~

「わかってるよ？暫くは牢の中だけだな？」

「さっすが公孫贇！話せるねえ？」

ったく・・・っとそうだ

「白蓮だ」

ホントは昨日でも良かったんだけど私の真名を教え、呼ばせることにした。

「はい？」

むっ？なんだ、その反応は？せっかく教えてるってのに！

「私の真名だッ！！」

「なんで怒ってんの！つうか真名って何！」

あっ・・・そういえば・・・

「知らなかったな？えっと真名っていうのは、~~~~~信頼した相

手にしか呼ばせない神聖な名のことだ」

少し怒ってしまったことに反省しながらも、説明。

「なるほろ！っていいの？」

「ああ、マサのお陰で私の軍は一人も減ってないし・・・それに・・・友人だしな？」

一瞬だけ、昨日の大工に言われた、夫という言葉が過ぎったのは秘密だ。

「そっか？じゃ白蓮！改めてヨロシクな？」

「ああ！」

ニカッと笑うマサと握手をし

「コイツらを縛って牢に連れていけ！」

盗賊団の後始末をして、盗賊団の討伐を終えたのだった。

第二幕のような様子! (後書き)

後書き

後半、番外と殆ど同じ流れに・・・

でも頑張りました。

感想などもありましたら是非に!

第二幕のような様子! (前書き)

前書き

後半は番外編と殆ど同じに・・・

でも頑張りました

ではアレをアレしてどうぞ。

相変わらず戦闘描写が下手くそだ・・・

第二幕のような様子!

「マサさん♪釘〴〵を打ちますよりトンテンカンテンントンテンントン♪」

はい、どうも! 本日は大工なマサさんです。

「あっアニキ! 親方いましたぜ!」

ン? なんかどごぞの聞いたような声が? はて?

「チビよくやった親方アアア!」

アレ? コイツも聞いたことあんな? つか親方?

「よお? 三人組? お勤めは終わったのかよ? つか親方って何?」

クルツと振り返りつつ、いつぞやのチンピラ三人組に声をかける。

「へい、お勤めは終わりやした! あっ親方ってなあ、アツシらにまともに働いた時のメシの美味さを教えていただいたんで敬意をはらってんでさあ」

ほう! なるほろ? つうこたあ

「コレからはまともに働くんだな?」

「へい! コレからは大工として生きていこうと思ひやす!」

「ってオラ! チビ、テメエが全部言うんじゃねえよ! 俺から言おうと思っただのに」

『ガッツ』

「イデッ！痛えッスよアニキ！アニキがもたもたしてるから？」

おうおう！仲がいいこって？前、見た時あアホ共だと思ってたが、根は悪いやつじゃなかったみたいね？

「あつ、親方！俺らはコレから色んな場所を旅して色んな街を直していこうと思ってやす、で何れは大陸一の大工になろうと！」

「アニキィ？大陸一は親方にきまってんじゃねえッスか？」

「そっ・・そうなんだな？に、二番目ならなれるんだな」

「余計なこと言うな！それぐれの気持ちだってことだよ！」

なれほど、なるほど？よし！

「ほら？やるよ？大工になんだったら道具くれえねえとな？」

今まで使ってた大工道具一式を三人組のリーダーっぽいやつに渡します、あっちなみにコレ、支給品じゃなくて俺が買ったやつな？

「えっ・・・いいんスカ？」

フッ・・・

「漢の船出だ？コレくれんこたあさせろや？ほら、持ってけ？」

「「「おっ親方アアア!!」」」

ハッハッハ!

「じゃ頑張れや?」

「「「ウッス!親方、ありがとうございやしたアアア!!」」」

とこうしてチンピラ三人組は、大工三人組にクラスチェンジし、旅立って行った。

まっもうバカなこたあしねえだろ?

・ ・ ・ ・

名もなき兵士達

「すげえ!前の戦いの時もすごかったけど」

「ああ漢だ!あの人こそ漢だぜ!」

先程のやり取りを少し離れたところで見ていたが、なんて漢っぽいんだ。

大守さまが連れた時は何処の馬の骨ともわからないやつだっと思ってたが・・・

「大守さまの目は確かだったな」

「ああ！あんな漢がいるなんてな・・・俺、アノ人の部隊に入りた
い」

「俺もだ！」

「「俺も！」」

そうだ、そうしたら俺達もアノ高みに・・・

・
・
・
・

マサ視点

「アン？隊長？」

三人組を見送った後、白蓮に話しがあると言われたんで聞いてみ
たら、なんか部隊を持って隊長にならないかと言われた。なんでも

「マサの下で漢を磨くだとか、アノ人こそ真の漢だ！とか、そんな
感じで部下達がな？私にはサッパリわかんないけど」

とのことらしい、よし、そこまで言われちゃ仕方あるめえ、漢・
マサナリ！ここはシツカリと

「やだメンドイ！」

断りまゝす！部下とか別にいらねっス。

「メンドイって、オマエな」

「訓練とか付き合うくれえなら別にいいけどな？まあぶっちゃけ、一人で気楽に動きてえわけさ？部隊とか持つちまったら、指示とかなんやらかんやらで頭がパーンってなっちまうし？」

「そっか？まっそっちの方がマサっぽいよな？わかった、部下達には私から言っとくよ？けど訓練とかは付き合ってくれるんだろ？」

「おう！そんなくれえならな？悪いね白蓮？」

と結局、俺が部隊を持つという話はお流れに。大層残念がってたらしいがスマン！そこは我慢して下されてことで？

でもまあ訓練は付き合うと言ったので。

「ボデイが甘え！」

『ズドッ！』

「ガフッ！」

早速訓練です、つってもまあぶっちゃけたただの喧嘩です、俺にとつては？

あっちなみに今のはリバーブローね？加減はしてますよ？

「ハアア！」

『シュッ』

おっ？考えごとしてたら斬撃迫ってきとるがな？

「まっ当たりはせんけど？」

『シュバ』

軽くバックステップ、ついでに後ろに迫ってきていた兵士Bを

「オラよ！」

『ズドッ』

と蹴り飛ばす、で近場にいた兵士Cの槍を掴んで

「そら受け取れ」

『ガッブオン』

その斬り掛かって兵士Aにぶん投げる

「」「グハァー」「」

うむ、中々の巻き込みっぷり！

とこんな感じで暴れ回り

「じゃ今日はコレまでな？またヒマがあったら相手してやらあ？」

「」「ありがとうございます」「」

訓練終了です、つかコレ・・・訓練になんのか？

「白蓮さんやそこんどこどうよ？」

いつの間にやら見学に来てた白蓮に聞いてみた。

「なるんじゃないか？マサみたいな、ばくきやらと闘ってたらいやでも強くなるだろ？」

どうやらなるらしい、まっそう言われてみりやそうかもな？俺は、まあ最初からバグ気味だったけど、なんやかんやでジジイと喧嘩しまくったつうのもバグの原因でもあるしな？

「マサ・・・私とも手合わせしてくれないか？」

おっ？

「いいぜい？」

と白蓮と手合わせすることに。

『ゴキゴキン』

クビを回しつつ指を鳴らし。

「じゃ舞踏^{おど}ろうか？」

どっかで使った気がするセリフの変化版、コレ定着さようかしら

？とかアレなことを考えてたら

「ッ！！」

『ヒュバツ』

白蓮の攻撃！

『ヒュッ』

マサはかわした、ってなんか白蓮赤くね？なんか赤くなってね？

「シッ！ハッ！」

『ヒュッ！フォッ！』

おっと、連撃！

『ヒュンヒュン』

キツチリかわす、ふむ、兵士さん達よか全然速いな？やっぱし赤いからか？秘密は赤さか？まっ速さは三倍どこじゃねえけど？

「だあああもう！当たれ！」

当たっても効かないよ？まっ当たらないけど？

『ヒュン』

ヒョイとかわして、背後に回り。

「ちょいと！」

白蓮の両ヒザに俺のヒザを合わせる。

『カックン』

所謂ヒザカックンですな？まあジャーマンと悩んだが流石にジャーマンはアレかと思っただし。

「おわっ！！」

『トスン』

うむ見事に決まった、白蓮ヒザ立ちの状態。

でポンと頭を手を置きつつ

「まだやる？」

「やめとく・・・背後に回ったのなんて全然気付かなかったし、とてもじゃないけど剣が当たる気がしないよ・・・」

うむ。

「じゃ俺ん勝ちってことで？」

「ああ・・・けどまた時間があつたら手合わせ頼んでいいか？当てられないのは悔しいし」

「いいぜい？まっ当たってはやらんけど？」

・
・
・

白蓮 視点

マサとの手合わせを終え自室へと戻った後書簡に目を通しながら手合わせの時のことを思い出す。

手合わせ前のマサの台詞で少し心臓が高鳴ったのは・・・いついやなんでもないぞ！
ンッン！

マサの動きは速いなんてものじゃなかった私の剣はスルスルとかわされ、気付かないうちに背後に回られ、気付いたらヒザ立ち。

私だって、それなりの武を誇ってると思ってたけど・・・

「アレは桁が違いすぎるな？」

マサの強さは異常だった、盗賊討伐の時から知ってはいたけど肌で感じて改めて思う。

マサか・・・この街ではスッカリ有名になったよな？

聞いた話しじゃ街に出た時に色々と手伝ったり、ならずもの達を蹴散らしたりしてるらしい、しかも、そのならずもの達から盗賊、或は山賊まで辿りついて壊滅までしてくる始末。

「ホント凄いやつだよな？ホントに天の御使いだったりしてな？」

天の御使い・・・その者、光りを放つ衣を纏い天から降り立ちこの乱世を終わらせることができる、っていう占いだっただよな？

まあマサは確かに天から降ってきたけど服は黒いし、それに

「やっぱりマサは天の御使いって感じじゃないよな？」

どうも、いめーじに合わないんだよな？ン？なんで私が いめーじ って言葉を知ってるかって？

マサに教えてもらったんだよ、ってコレ前にも似たようなことを言ったような？

まっいっか？

考えごとをしながらも書簡を読みおえ、少し時間があいたので

「マサに新しい変化球を教えてもらいに行こうかな？」

マサが広めた、野球という遊び、たまに私も参加してるけどコレが結構面白いんだよな？

他にも、さっかーとかいう遊びも広めてたな？

私は野球の方が好きだけど、アノ三振ってやつを取った時が気持ちいいんだよな？

私がそんな事を考えていたら

「白蓮く出前だぜい？」

マサが食事を持ってきてくれたってそういえばまだ昼はまだだったっけ？

「ああ！ありがとうマサ」

とりあえず変化球のことは置いておいてマサが持ってきてくれた食事をいただく。

相変わらず美味しい。

「なあマサ？今度、私にもマサの国の料理教えてくれよ？ほらアノみそ汁ってやつ？」

マサは色々と見たことがない料理を作るけど私は特に、みそ汁ってやつが気にいってる朝に飲むと身が引き締まる気分になるし。

「ン？いいぜい？だったら・・・明日の朝にでも一緒に作るか？したらすぐ覚えんべ？」

「ああ」

よしッ！明日は少し早く起きないとな？

それから食事を終えて、さっき考えてた通りにマサすらいだーという変化球を教えてもらった。

ためにし投げてみると

『シュークンッ』

『スパン』

「ナイスボール！カーブよかコッチのが相性よさそうね？よしガンガン投げ込め！このスライダーをキメ球にするのだ！」

マサに褒められた、その日は日が暮れるまで投げ込みをした流石に肩が痛くなってしまうけどマサに まっさーじ してもらったら直ぐに痛みは引いた、凄く気持ちよかったのでつい寝てしまい

「起きれ？晩メシだぜい？」

マサに起こされた時、寝顔を見られたからつい照れてしまい顔が赤くなった、そしたら可愛いと言って撫でられた

ううう余計照れるだろ？

とそんなことがありながらもマサと食事をし溜まった仕事を片付けて今日は寝ることにした。

・
・
・
・

マサ視点

「ズズッ・・・中々美味えな？始めてにしちゃ出来じゃね？」

「そっそうか？よかった」

昨日約束してた通りに今朝の朝メシは白蓮と作りもうした、さっきも言ったが始めてにしては実に上出来。

まっ基礎が出来てたんでしょ？

むろん撫でといた。

その後、白蓮さんなにやら客が来るとのこととでなんか謁見の間的なところへ、俺はテキトーにブラブラ。

「あつまサさん！」

ブラブラしてたら城にお勤めの女の子に呼び止められたって、ちなみに最初は城の人達、さま付けしてたけど今は呼び捨てか、さん付け

「公孫賛さまが御呼びです」

脳内コチャコチャしてたら、どうやらそういう用事らしい。

「うい！あの謁見の間的な所か？」

「はい、では私は」

お勤め女の子Aに確認をとって、謁見の間的な……ってメンドイな？白蓮の所へスツタラスツタラ向かいます。

つと到着！

「白蓮さんや？用事って何さ？隊長はやらんぞ？」

「隊長のことじゃないから、えっと今日来た客将を紹介しようと思
ってな？」

ン？キャクシヨウ？

「キャクシヨウって何？なんかの必殺技？」

わからない言葉が出てきたら必殺技だと思え！そしたら

「そんな技ないからな？客将っていうのは・・・マサみたいな感じ
だな？戦いが主だけど」

たいてい外れるから？つとキャクシヨウね？客将って書くんかね
？っておよ？

「その噂の客将は？おらんがな？」

「ン？アレ？さっきまで・・・ッ！マサ！」

ン？って！

『シュバッ』

背後から槍を突き出された

『ガキン』

当然効きませんけど？

「ふむ・・・噂通りホントに素手で槍を受けるのだな？」

槍を突き出してきたのは女の子でした、でその女の子感心したように頷いてます。

「カッチカチですから？ってオイ！ユーね？アレだよ？初対面の人に槍を突いたらいけないって習わなかったんか？マサさんだからよかったけど他の人だったら貫通してますよ？」

定番しつつ注意！

「噂の真相を確かめてみたくてついな？」

なるほど？まあそういうこともあらあな？

「趙雲！オマエいきなり何を」

っうお！白蓮さん怒ってる？

「まあまあ白蓮さんや？マサさん別に怒ってねえから？趙雲君とやらを許してやって・・・アレ？」

趙雲？アレ？

「趙雲？」

趙雲君（仮）を指差して確認。

「そうだが？」

ああゝ趙雲（決）・・・趙雲ねえ・・・

「マジかアアア！えっ？はっ？女の子？は？趙雲女の子？アレ？趙雲女の子オオオ！」

三国志なのは知ってたよ？けどアレだよ？三国志は趙雲、男だったはずだよ？確か？多分？アレどっちだ？

「まっマサ？大丈夫か？」

混乱してたら白蓮さんに心配された、っとそうだ！

「白蓮先生ゝちいと聞きたいことが、曹操って女の子？孫策は？」

覚えて有名所の名前を上げて確認。

「ハッ？マサ何を言ってるんだ？二人共、女だぞ？」

おう！半ば予想通り！ってそういやなあゝんかそんな設定の話しを聞いたことあるような・・・まっいいさね？ぶっちゃけ三国志もよく覚えてねえし？そういうこともあるってことで？

「おけ落ち着いた！」

切り替え完了。

「そっそうか？ならいいけど」

いやスマンね白蓮さんや？っとイカンイカン！

「ほったらかしだったな？あつ俺あ鬼島 政成ってんだ？マサかマサナリでヨロシク！」

「どれが名でどれが字なんだ？」

おう？字？名？いや名はわかるけど字って何？

「ああゝ趙雲？マサはカクカクシカジカっていうわけだ」

困ってたら白蓮さんが説明してくれた実に助かります。

「ほう！それは天の御使いとだったとはどうりで素手で槍を防ぐと
というようなマネが」

「違いますよ？つか俺がいた所でも大概の人は貫通するから？俺
が特殊なだけ？更にいうなら天の国じゃなくて別の国って解釈でヨ
ロシク」

勘違いしてそうだったんでザッとそう説明。

「なるほど・・・フフ・・・鬼島殿？」

「マサかマサナリな？」

「むっ？では政成殿と」

いやいや趙雲さん

「殿はいらんで？かたつくるしい」

「では政成と」

それでよし！っと

「で何？何か言いかけてたべ？」

「先程の続きをしたいと思ひましてな？いかがか？」

ほう、さっきの続きね？

「いいぜい！喧嘩は買いだ！かかってこんかい！ってな？」

「フフ・・・そうなくてはな？」

おやま嬉しいそうね？趙雲バトルハッピーか？

「趙雲やめといった方がいいぞ？」

「何をおっしゃいます公孫賛殿、コレ程の強者を前にしては武人としての血が抑えられますまい」

武人ねえ？まあ言われてみりゃそんな感じもしますな？

「まあそこまで言うなら止めないけど・・・じゃあついて来てくれ」

「あいよ！」

「フフ・・・楽しみだな」

・ ・ ・ ・

はい到着！昨日の訓練所です。

『ゴキゴキン！』

クビを回しながら指を鳴らす

「じゃやるかね？」

「フフ・・・さて噂の鬼人おにびとの力、見せていただく！」

グツと槍を構えながらそう言う趙雲君・・・って待て！

「鬼人って何？まさか俺？」

「おや？知らないと？鬼のごとき強さ鬼人・政成・・・政成はそう呼ばれてますぞ？」

「マジかい！アイタタ〜何その中二くさい二つ名？」

もうアレだよ？かなりアイタタ〜つか二つ名って・・・二つ名って・・・

「あっそれ私が広めた！」

ってオマエか白蓮ンン！

「何してくれちゃってんの！マサさん明日から街歩けなくなっちゃうじゃん！あっアノ人、鬼人って言うんだって？って言われちゃうじゃん！どうしてくれんの！」

マサさんもう17だよ？もういい年だよ？

「まあいいじゃないか？結構似合ってると思うぞ？それより・・・よそ見は」

ン？

「禁物ですぞッ！」

『シュバ！』

「素手バリアアア」

『ガキン』

慌てず騒がず素手バリア！

「ふむやはり通らないか・・・しかしコレならッ！」

『ブア！シュバババ』

おお～速え！白蓮には悪いけど趙雲のが強えな？

『ガキンガキンガキン』

あっキツチリ素手バリアしてますよ？

「クッどんな硬さだ・・・しかし速いは私に分が」

おやま？確か速いっちゃ速いけど？

『シュン』

N I N J Aで背後に回り込み

『トントン』

肩を指でトントンして

「速さはなんだって趙雲君？」

ニツと笑いながらそう言ってみる

「クッ！いつの間に！ハア！」

『ブォッ！』

驚きながらも薙ぎ払いする趙雲、それをヒョイとバックステップで避けつつ。

「今だよーん！ほれほれ？コッチ！」

手の鳴る方へってか？

「クッ！この！ハアア！」

『シュバババ！』

そこから全部の攻撃を避けまくります、たまに

「捉えたッ！」

『スカッ！』

「なっ！」

「残念？残像でした？」

とかしてみたり。

「ハアハアハア・・・」

おっ？趙雲君？息が上がってきたようね？ではではそろそろ終えにすっかね？メシの時間だし。

つうわけで

「じゃそろそろイクぜい？」

『シュバッ』

N I N J A ~ ~ ~

「また消えッ！」

『ガッン』

「ツ~~~~げっゲンコツ？」

はいゲンコツですよ？

「さっき不意打ちのぶんな？コレでチャラってことで」

「気にしてないと言ったはずでは？」

むっ？まあ確かに言っただけ？

「一応だ一応！コレはアレだ教育だ！」

「きょ・・・教育？」

「指導でも可！」

思いつきじゃないんだから！ホントなんだからね！ってツンデレはやっぱキモイな？俺がやるもんじゃないわ？

「プッ・・・教育・・・ハハハ！いやぁ参りましたコレは勝てそうにありませんな」

おう？趙雲さん何がツボったんだ？まっいいさね？とにかく

「俺！勝~~~~利！っと腹減った？メシにすつか？趙雲も食う？」

「政成が作るのか？」

「おう！」

「それはそれは楽しみですな？」

フツ・・・期待には答えますよ？とか考えてたら白蓮が近づいてきて

「まっ予想通りだったな？しかしマサ、ホント凄いな？流石は、ばぐきやら」

白蓮に褒められたっぽい？

「ばぐきやら？ばぐきやらとは？」

「規格外、常識の斜め上を歩いてる奴ら、まあマサのことだな？マサのいた所じゃそういうんだと」

「なるほど・・・確かに政成は斜め上でしたな？」

趙雲さんや？斜め上の部分だけ抽出されたらなんかモヤモヤするんですが？確かに白蓮には、そう言ったけど。

「フフ・・・ばぐきやら・・・ハハ！実に面白い御仁と知り合いになれたものだ」

「まあ確かマサがいると面白いぞ？同じくらい疲れるけど」

むむ？

「白蓮さんや？そこは頑張ろう！白蓮ツッコミせなんだからマサさん大変なことになるよ？頑張れ！頑張れ！」

「ああゝゝもう少しは抑えろって！」

「無理無理！」

「フフ・・・やはり面白い御仁ですな」

とこんな感じでコチャコチャありながらも白蓮、趙雲と昼メシを食いました、趙雲君にも好評でござった。

実に満足！で晩メシも三人で食い、さて寝るかと部屋に戻ったら

「お待ちしてましたぞ？」

何故か趙雲が部屋におりました、はて？

「どしたん？なんぞ用？」

「フフ・・・夜伽に・・・」

夜伽？なんじゃそら？と俺ハテナ顔、したら趙雲君

「こういうことだ」

『スルッ』

なんか脱ぎだした？なるほど？夜伽ってアレね？って

「服を着なさい！みだりにそういうことしちゃいけませんよ！女の子なら慎みを持ちなさい！マサさん怒るよ！」

「何故？折角こうして」

『ガッン』

ゲンコ！

「服・を・着・ろ！」

「ッッッ仕方ありませんな」

いや何が仕方ないねん？つうか趙雲君や？

「何故にこんなマネを？」

「不意打ちの謝罪と食事の礼を兼ねてな？」

ふむ・・・

「アホ？アホの子だコイツ」

「アホ！？アホとは失礼な！しかもいうにことかいてアホの子ですと！」

いやさ？だってオマエ？

「そういうこたあ惚れた相手とするもんでい！少なくとも俺は！つか不意打ちはゲンコしたしメシは俺から誘ったろうに？」

最近の若者の性はこのなにも乱れとるといのか？ ああ現代社会の弊害、まっ現代じゃないけど。

「ふむ、おかしいですな？ 普通の男なら喜んで貪りつく」

「指導」

『ガッン』

「ッッッ何故!？」

「なんか言い方が卑猥だった！つかさっきも言ったじゃろ！女の子なら慎みを持ちなさい！後、俺あ普通じゃねえから」

その辺りもガッチガチだぞ？

「むっ・・・それはわかったが、それでは私が魅力がないみたいだぞ？ コレでも容姿には自信があったのだが・・・ン？ 普通じゃない・・・まさか・・・」

「アッチの趣味はねえよ？ 後、趙雲、十分可愛いと思うぞ？」

勘違いされそうだったんで、その部分を否定しつつ、そう言う

「では・・・」

『グッ』

「ええい脱ぐなっつもの！ 惚れてない奴にはそんなんはしねえつってんでしょ！」

「残念ですな、どうやら私は政成に嫌われてるようだ」

はっ？

「嫌ってねえよ？つか好きな方だぞ？」

「ではッ！いざ！」

『グッ』

何がいざやねん？

「脱ぐなつつうの！好きではある！けど惚れてはいない？わかる？」

俺的ルール！この辺りは自分の中で違いがあるんです。

「むっ・・・それはまた複雑な？」

「男心は複雑なんです！」

「普通逆では？」

フッ・・・

「俺は」

「普通ではないんだろ？」

うむ！そういうことです。

「フフ・・・仕方ありませんな夜伽は諦めますかな？が・・・一献付き合ってもらいたい」

『チャップン』

おう？酒？ふむ・・・

「俺あ未成年なんだけど？まっ酌くれえはいいぞ？ほれ趙う」

「星だ」

ン？

「私の真名だ」

はあ

「いいの？」

「ああ、政成は面白い御仁だからな？政成なら構わない」

どうやらいいみたいね？

「じゃ星？」

『トクトクトク』

「ン・・・ふう・・・酌がいいとより美味しく感じるな？」

「そういうもんか？」

「そういうものだ」

と夜は星の晩酌に付き合いました、あつ俺は飲んでねえッスミ○
ミ○ですまりました未成年だしね！

で酔っ払った星が脱ぎだしたんでキツチリ巻いた。

直後文句を言われたが

「オマエ、実は酔っ払ってねえだろ？」

つつたら

「・・・そんなことはないですぞ」

とか言ってたけど、めっさ目が泳いでたもうバタフライ並にな！

第二幕のような様子！（後書き）

後書き

ウ○キでハムさんを調べたら装備してる剣の名前が

『普通の剣』

だった、思わず爆笑してしまった直後なんか悲しくなった・・・

そんなハムさんに幸あれ！

今回出番が薄かったけど・・・

次回！次回はきつと！

第三幕のような様子! (前書き)

前書き

久々にコッチ短い・・・

けど頑張りました。

いつものようにアレをアレしてどうぞ。

第三幕のような様子!

「たっだいまゝ」

「ン? マサどこに・・・ってまたか?」

「まあな? 最近は減ってきたと思ったんだけどねえ?」

あつ俺が何をしてたかとな? まあアレです狩りです。

簡単に言うとチンピラをボコ↓アニキ登場↓アニキボコ↓親分登場↓親分ボコを繰り返してたらなんやかんやで盗賊やら山賊やらを潰してました! みたいな感じ?

まあコレも日常茶飯事なことだけどね?

ちなみに今回は

「フッ・・・政成と共に行動すると自身の鍛練にもなるな」

星さんもご一緒です、まあ前々からちよくちよく参加はしとるんですけどね?

「星も一緒だったのか? マサはまだアレだからいいけど星は危ないだろ?」

「白蓮殿それは大丈夫ですぞ? 政成との手合わせで私の武は日々磨かれてますからな? 白蓮殿としてそうでありましょう?」

「まあ確かにそうなんだけども？以前より強くはなってるような気がする相変わらず掠る気もしないけど・・・」

「それは確かに・・・まあそれはさておきいざとなったら政成がなんとかしてくれますからな？ハッハッハ」

「それもそうか？」

はいコノ二人なんやかんやで仲良くなってますお互い真名で呼び合うくらい

ちなみに真名で呼び合うようになったきっかけは手合わせ・・・ではなく野球でした！

あの時の星選手を三振に仕留めた白蓮選手のスライダーのキレは中々に凄かった。

その後友情が芽生えた瞬間はマサさんも胸が熱くなったもんだぜ。

いやはや白蓮さんも中々のピッチャーに育ったもんだ。

「この調子で幽州ハムファイターズ優勝を目指すぞ！」

「なんのだよ！！っていうかハムから離れろいい加減！」

「ナイスツツコミ！」

流星は白蓮だぜ！メキメキ実力が上がってるな（ツツコミの）星

も流石ですなとか言ってるしね？」

というような日々が何日か続き・・・

「なあマサ？私達は何してるんだ？」

「旅？」

「そうですね？見物を広める為に必要なことですぞ白蓮殿？」

はい只今俺達幽州から離れて諸国漫遊の旅に出ております。

「私一応県令なんだけど？」

「「細かいことすわい（な）」」

「細かいかッ!？」

いやいや白蓮さんや？

「城を出る時白蓮だってノリノリだったじゃん？」

「うっ・・・確かにそうだけどさ？」

「引継などシツカリとなさっていたでしょう？大丈夫ですぞ？白蓮殿の城の者は優秀ですからな？それに裏切りなどまず有り得ないですからな？コレは政成の影響もあるようですが」

「確かになあ・・・あの城の男連中は政成にかなり心酔してるから

な・・・下手したら私より忠誠誓ってんじゃないかアイツら？見送
りも凄かったし」

まあアイツらもノリがいいからな？出る時も

「旅の先々で泣いてる人の涙を止めるそんな旅だ」

ついたらめっさ盛り上がってたし？なんか学校の時のヤツらに通
じる物がある。

「まあ旅も楽しいっしょ？たまには？」

「確かにたまに別の国を見てもいいけどな？ただ・・・」

むっ？ただ何だね白蓮君や？なにか不満でもあるのか？食料か？
食料に関してはガツツリ狩りしてるから問題はないはずだが？飲み
物はミ〇ミ〇あるし？

「ヘッヘッヘ・・・良い女だなあ？野郎ども男は身ぐるみはいで殺
せ？女は・・・ヒヤハハハ」

「アニキも好きですなあ？」

「俺はコッチの女がいいなあ？」

ふむ・・・うぜえな？

「異常にこういう奴らに遭遇するのは何故だ？」

疲れた顔の白蓮さん

「政成がいるからでは？それに・・・私の体は政成に食られるという」

『ガスッ!!』

前半は納得するが後半は指導！

「ツ・・・本当につれないですか？私はいつだった、かも～んなのだが？」

星君や？教えた横文字をアレな使い方すんなつうの？もう一発イクベきか？

「結構！」

いらならしい。

まあとにかく

「白蓮？ほらアレ！アレ」

「やっぱりやるのか？アレ？」

勿論ですとも！ン？アレとは何かとな？フツ・・・伝統芸さ？その某時代劇の

「ンツン・・・マサさん星さん・・・懲らしめてやりなさいッ！」

ビシツと指示を飛ばす白蓮さん！寧ろ今は御隠居！

「ハッ!!」

『ゴキゴキン!』

クビを回しながら指を鳴らす俺。

『スッ・・・チャキッ!』

目を細めて槍をピタッと構える星さん。

「たった三人で何ができる! オマエらやっちまえエエエ!!」

「「ウオオオオオ!!」」

フッ・・・イクゼい!

く俺達無双中く

「グフッ・・・つ・・・強え・・・」

『ドサッ』

はい終わり!

ン? はしまったとか言うな! もうね? 戦闘描写はお腹一杯だから! 苦手だから! カンベンしてね? ホント? マサさんからのお願い!

あっでも一応は

俺は相変わらずグーや人間ボーリングやらでブツ飛ばしていき

星は槍で突っ込みつつ素早く振るってブツ飛ばしていき

白蓮さんも剣で近付いてきたヤツを迎撃という感じ欲を言えば杖がよかったんスけどね？

まあとにかく無傷で勝利！で

「オマエらの事はキッチリと報告しておく！おって厳しき沙汰があるものと覚悟しろ！」

白蓮（御隠居）のキメ台詞。ちなみに報告は近くの城や偉いさん
とこね？

「ではマサさん星さん・・・参りましょうか？ハッハッハ」

御隠居笑いで歩き出す白蓮さん

「白蓮ってなんやかんやでノリがいいよね？」

「嫌がってるふりをしてホントは好き・・・コレが政成が言ってた
つんでれというやつか？」

「ン~~~~微妙に違う？」

何処がと言われたらアレだけどなんか違う気がする？ツンデレっ
うには弱い気がするし？

「ツ~~~~~~~~とっと行くぞ！」

おお〜赤い！赤白蓮！

ズンズン進んで行く赤白蓮の後をついていく俺と星でした。

にしてホントに世直し旅みたいな感じになってきてるような気が・
・まっいいさね？旅には刺激も必要さ！

とかコチャコチャ考えつつも歩ってたら今日泊まる村に到着。

「今日は久々に村に宿泊すな？」

「だな？まあ野宿って言っても快適だったけど？」

ジーツと俺を見る白蓮さん

「そうですね？あの簡易の小屋は便利でしたな」

うむ星さんの言う通り組み立て式の小屋を作成して持ち歩いてお
りますメイドイン俺！

「アレは凄いやな？天幕なんかより快適だし？広いし？一人一部屋
あるからな？」

「私は政成と一緒にでも良いのですが・・さすれば何れは・・・」
グッ！』いやなんでもないぞ？ンッンただアノ小屋は政成以外では
持ち運びが出来ないでしょうがな？」

まあ結構重いからな？大体家一軒分くらいの重さは軽くあるし？
いやもつとあるか？俺が持ってきた時二人ともマジでビックリし

てたものな？

まあすぐにマサだからですんだけど。

ちなみにデダイヤルはミ〇ミ〇専用だから他の物は入らないでござる。

ン？そういうところも融通きかないだど？ほっといてんか！！

「マサ？何やってるんだ？早く宿に行くぞ？」

「その前に食事でしょうな？」

おう！脳内コチャコチャしてたらなにやらそういう予定が組まれたようです。

でメシ処へ・・・

「マサのが美味いな？」

「ですか？政成といると舌が肥えて困る」

「嬉しいけれど店主がめっさ睨んでるからやめれ？」

ごっさ睨まれました店主さんスンマセン！俺は結構美味しいと思いますよ？ちいと辛みが強いけど俺の好みに合ってるし？

ちなみに星さんはメンマ丼とやら食ってます。

メンマが大好きらしいミ〇ミ〇が大好きな俺と通じる物があるな？

今度メンマを漬けて星に食わしてやろう」

「政成ホントか！その礼は体で！！」

『バツ』

どうやら口に出てたらしい

「いらん！つうか脱ぐなっつうの！他のお客さんビツクリしてる上に男性客がリミットブレイク寸前だから！そして白蓮何しれ〜っと席離れて、えっ？私他人ですみたいな顔してんの？オマエもツツコめや！」

コイツは何故か度々脱ぎたがる。そして白蓮は度々他人になりたがる。

「何を言い出すかと思えば私もですが白蓮殿も政成にツツコまれる側」

『ヒュシユル！』

「星？コレ以上アホなことを言ったら・・・わかるな？」

一瞬で背後に回りクビに腕を回す。

「背後からの抱擁か？なるほど政成は背後からが・・・」

『キュ！』

「うっ・・・」

『パタッ』

どうやらわからなかったらしいキツチリ締め落としました。

「はぁ~~~~またか？騒がしくて悪いな店主？コレお代な」

そんな俺達に慣れた感じの白蓮さんでした。

で騒がしくもメシが終わったので宿へと移動。

あっグツタリしてる星さんは俺が小脇に抱えて運んでいます。

落としたの俺だしね？

「なあマサ？星を起こさないか？このままだと捕まるぞ私たち？」

言われてみれば確かに？これアレだからね？パッと見拉致だからね？

つうわけで

「そぉい！」

『ゴリキッ！』

気合い注入で起こしました音が香ばしい感じなのは仕様です。

「うっ・・・」

キツチリ起きるしね？で目を覚ました星さん

「ふむ・・・この状況・・・なるほど・・・とうと」

「また寝かしつけるぞオラ？」

「結構」

早めに手をうっておきました。

で星を下ろして宿へとGOして宿へと到着。

なんと全員同じ部屋！部屋がなかったらしい。

まあ別に俺はいんだけど

「ちゃんす！ギラッ！」

教えた横文字をそういう使い方すんなつうの星！

それに比べて白蓮さんは借りてきたネコみたいになっとなります。

とりあえず

「言っておくが大丈夫だぞ？マサさん的には以下略だから」

ボタンがぼとりのはないと説明。

「それはそれでなんか・・・」

どうせいちゅうんじゃい？白蓮さん難しい年頃なのか？

「まあとりあえずはコレから何処に向かいましょか？俺的には曹操とか孫策とか見てみたい」

俺でも名前くらいは知ってるやつらだからな？チクツとだけ見てみたいわけさね？

「そう言えばマサのいた所では有名だったらしいからな？私は・・・アレだけど・・・」

うおう！なんか白蓮さん落ち込みなさった？

「頑張れ白蓮！負けるな白蓮！大丈夫！白蓮なら！後々後世にてツツコミとして」

「ツツコミかよ！私の価値はツツコミか！」

「まさか！白蓮いいやつだし？それに俺がたまたま知らなかっただけだし？俺勉強苦手だったしな！？それに星にしたって俺は知ってたけど今となっちゃ名前は同じだけの別人的な認識だし？」

「政成のいた世界とやらでは私は男だったらしいからな？確かに似て異なる世界といったところか？」

そうそう俺的にはそんな感じ？でも曹操とか孫策とかはどんな感じかなあと気になることは気になるわけです。

後一人有名所がいたんだけど・・・はて誰だったか？かなり有名なんだけど・・・まっいいさね？ど忘れですわい。

「うーん・・・そう言われたら・・・もしかしたら私も男だったかも知れないな？想像出来ないけど？まあとりあえずどっちに行くにしろもう少し先の街まで行ってからだな？」

結局は白蓮さんがそう結論つけて本日は就寝となりました。

ちなみにやっぱし星がスッパで俺の布団に侵入してきたのでキツチリ巻いたぞ！

何故に懲りないコイツは？

第三幕のような様子！（後書き）

後書き

いや〜どっちに行こうか迷い中！

やっぱり魏かな？でも呉も・・・

劉備さん達はとうしよう？途中で遭遇？なんか時間軸とか全然わからない？どうしよう？

やっぱり無茶だったか・・・

キャラもフワフワだし・・・

ですが次回も頑張りますんでお暇ならまた見てやって下さい。

感想などありましたら是非。

第四幕のような様子! (前書き)

前書き

アノ人達の登場です口調や時系列わからなし・・・なんか変な感じに・・・

それでも大丈夫という強き心をお持ちの方はどうぞ!

第四幕のような様子!

「ゴクリ・・・こいつアすげえや?」

「あっああ・・・アレは凄い・・・」

「政成も変わっていると思ったがアレは・・・いや方向性の違いか?」

有名な人を見に行こうツアーを続ける俺達一行そんな俺達の目に映るのは確実にアレな三人組いや一人はまともだけど残りの二人がね?

なんか妙にクネクネしてるマッソーな漢! しかもビキニパンツ一丁という漢っぷり・・・ふむ・・・

「マサ、星とりあえず目を合わせるなよ? ソーッとやり過ぎそう関わりたくない」

「白連殿の意見にはおおいに賛成ですが・・・遅かったようですね? ほら」

『スツタラスツタラ』

「よお! オマエら何? 大道芸人?」

面白そうだったから話しかけてみた。

「マサアアア! なんで話しかけてんだオマエエエエ! 明らかに関わ

っちやいけない人種だろオオオ！特にその半裸のヤツらはアアア！」

「ちよつとオオオ！それは失礼よおん！こんな可憐な漢女おとめを捕まえ
て〜」

「そうじゃ！貂蟬ちゃんに失礼じゃ！」

おう？薄々は予測していたがソツチタイプだったか・・・ふむ・

「そうだぞ白蓮君？そういうアレな考えがイジメとかに繋がるんだ
ぞ？いやあうちの白蓮がなんか失礼なこと言っちゃってホントスン
マセンね？でも根はとっても優しい良い子なんで許してやって下さ
い」

あえてそう対応！何せ紳士だから！まあ今のはどっちかつうとオ
カンだけど。

「いいのよアナタはわかってるわねエ？あらよく見たら・・・良
い男！！ジュリどう今夜あたり」

ススツとビキニマツソー1がにじり寄ってきた・・・ふむ・・・
ソツと拳をビキニマツソーの腹に添えて

「あらん？」

「虎○！！」

『ギュドムツツツ！！』

修羅な一撃を叩き込みました。

「むっッ!!」

『ズルズル・・・ドサッ!』

ゆっくり崩れ堕ちるビキニマッソー! 反省も後悔もしておりません!

「凄い技だな政成? 拳大に陥没してるぞ?」

星さんが感心したようにそう言って下さいました。

通○拳と迷ったんだけどね? 今回はコッチ!

「ヌオオオ! 貂蟬ちゃん貂蟬ちゃんちょっと何てことをするんじゃないアア! 漢女のお腹を陥没させるなんて子供が産めなくなっちゃったらどうするう~~~~」

いやさ・・・うん・・・

「無理だろ初めから? どんな雌雄同体だっつうの?」

雌雄同体・・・カタツムリとかのオスとメスが一緒くたのヤツらのことね?

「儂ら漢女じゃから!! 夢を見たっていいだろう!!」

「それはもう夢じゃなくて妄想だろ?」

白蓮さん厳しいツツコミです。

「ヒドイ！ヒドイ〜〜ダーリン！」

泣きながら唯一まともな感じの男の人に縋り付くビキニマッソー
2・・・ン？ダーリン？えっ？ダーリン？

「マジで？えっ？いや・・・うん人の趣味にとにかく言うつもりは
ねえよ？理解はできねえけど？まあそれも一つの愛の形だよな？理
解はできねえけど？」

グッとダーリンさんに向けてサムズ。

「政成はやはり器が大きいですな」

「いやマサ？星？アイツ明らかに困ってるから？必死で誤解だ！つ
て訴えてるから」

うん知ってる気付いてはいるけどあえてスルーしてました、なん
か面白そうだったし。

・ ・ ・ ・

でアレから俺が沈めたビキニマッソー1が気が付いたんで改めて
自己紹介。

「私は貂蟬よろしがたない旅の踊り子よ〜ん？」

ビキニマツソー1は貂蟬というらしい、なんか貂蟬って聞いたことあるような？わからん？思い出せん？

「俺は旅の医者で華佗だ！ゴッドヴエイドオー五斗米道を継承している」

ふむ

「ゴッドヴエイドオー五斗米道とな？なんか必殺技みてえだな？」

「うむ俺にとっては必殺・・・まあ医術だが似たようなものだな？」

ほうほう！まあなんか声からして必殺技とか撃ちそうな声だしな？
ヘル・ア○ド・ヘブン！みたいな？

「必殺って・・・どんな医術だよ五斗米道って・・・」

むむ？白蓮よ？

「「ゴッドヴエイドオー違アアアう！正しくは五斗米道だ！！」

発音が大切なのだよ！多分！

「フツ・・・キミはわかってるな？」

「うむ一々『う』に濁点はたるいけどそれは譲ってはいけねえ部分かなあと？」

誰にだって譲れないものがあるもんです。

「ああ・・・三人の中で唯一まともかなと思ってたのに・・・私の認識が甘かった・・・」

「まあまあ白蓮殿？政成に比べれば軽いものでしょう？」

「そうだけど落差がな？」

うんキミ達？本人の前でする話じゃないからね？マサさんが何言われても凹まないと思ったら大間違いだぞ？

まあコレくらいじゃ凹まないけんど？

「僕は卑弥呼だ！謎の巫女じゃそして貂蟬の師である！」

脳内コチャコチャしてたらもう一人のビキニマッソーが自己紹介・・・つうか謎の巫女って・・・しかも貂蟬の師って・・・ぽいけど？そして巫女以前の問題で謎だけど・・・ン？アレ？

「卑弥呼だった？今卑弥呼だった？マジ卑弥呼？えっマジで？」

「そうじゃアアア！」

マジらしい・・・卑弥呼が男とは・・・しかもマッソー・・・まっそういうこともあるか異世界だし？

「マサどうしたんだ？なんかその反応一回見たことあるけど？まさか・・・」

「そっそ俺んどこじゃ卑弥呼って女らしいんだわ？実際はわからんけど？それになんつうか俺がいた国？日本な？にいるはずなんだけどな？流石は異世界？不思議だね」

いやはや不思議は不思議？

「にほん？確かに儂は元々は別の国の出じゃ！今コッチでダーリン達と旅をおるがな！」

ほうほう！まっこんくらいん時期は日本つう名前じゃなかった・
・ような気がするしな？

「ところでアナタ達わん？みたところアナタ達も旅をしてるみたいだけどん？」

ン？俺達か？ふむ・・・

「しがない越後のちりめん問屋の隠居とそのお付き？」

「違うだろ！」

いやさ白蓮？

「まだ印籠出して副將軍って明かすのは早いべさ？時間的に？もうちょい後じゃなきや？」

「副將軍ってなんだ副將軍ってッ！！県令だから！副將軍って意味

が・・・いやわかるけどマサが教えてくれたアレだっていうのはわかるけど！」

「ふむ・・・印籠とはコレでしたかな？」

オイオイ星さんや？

「まだ出しちゃダメだっつうに？」

ちなみに印籠は俺作です！真ん中に『公』という文字が書かれています。まあ見ようによってはハムだけど？

「ン？県令・・・えっ？アナタ県令だったの？県令が旅とかして大丈夫なの？」

「あっああ城のやつらも快く見送ってくれたし？まあ私も正直どうかと思っただけどな？」

前回も言ってたけどね？なんか大丈夫だったんでござるよ？

とか思いつつも一応は

「あっ俺は鬼島 政成ってんだ？マサかマサナリって呼んでやってくれや？」

「私は公孫賛さつきもちよつとだけ言っただけど幽州の方で県令してるな」

「趙雲だ公孫賛殿のところで客将をしている」

自己紹介。

「鬼島・・・政成？えっ？・・・まさかアナタ・・・噂の鬼人？」

えっ？貂蟬さん？は？

「噂って？」

「全ての武器を弾き返す鋼の如き肉体奮う腕は嵐を起こしその動きは雷速の如く一騎当千どころか当万の力をもつ鬼神！鬼人・政成・・・有名だぞ？」

華佗さん？ちょ？えっ？はっ？何その中二設定？なんか色々増えてるんですけど？

「順調に広まってるなマサ？私も名付けたかいがあるよ？」

「ですか？あながち大袈裟でもありませんしな？」

いやさ？うん確かに大袈裟でもないよ？残念ながら？けどさ？なんつうか・・・うん
なんかアレなんですけど？やっぱしモヤモヤが・・・

まあいいさね？諦めよう・・・

「どうも・・・巷で噂の鬼人・政成ことマサさんです・・・チクソウ」

「まあ・・・なんだ・・・うん落ち込むな？そういうのもいつかい思い出になるさ？」

華佗さんに慰められました・・・その優しさが痛いです。

「まさかホントに鬼人だったとはね」

「うむ！もつと凄い・・・それこそ鬼みたいな人物だと思ったがな！」

寧ろオマエの方がピッタリだとマサさんは思うわけです貂蟬さん卑弥呼さん？

「ちよつとオオオ！誰が鬼よオオオ！可憐な漢女だって言ってるでしょ」

「そうじゃ！花も恥じらう可憐な漢女じゃぞ！」

ええい！にじり寄ってくんなつうに！

「ハートブレイクショット！」

『ギルドン！』

貂蟬の心臓ハートにスクリューブロー

「だてえ！？」

『ドクン・・・ドサッ！』

よし！まず一人！

「むう！貂蟬ちゃん！えっ待て？次はまさか」

うむ正解！

スツと掌を卑弥呼の鳩尾の辺りに構え

「通・・・」

『ダンッ！』

地面を踏み込み

「背・・・」

『ギュル！』

踏み込んだ力を足から腰・・・胸と回転させるように伝え・・・

「拳ッ！！」

『ガボンッ！！』

一気に放つ！！

「ちんみ~~~~~！！」

『ギューン！』

うむ大分飛んだな？見事！

「ただ今の記録10メートル20でっす！」

目算で距離を出してみました！

「いやはや先程の技といい今の技といい凄まじいかぎりだな？」

まあ完全にパクリだけどね？

「っていうかやり過ぎだろマサ？」

「大丈夫大丈夫！アノ手の類は異常に頑丈って相場で決まってるだわ？ なっ華佗さんや？」

「うむ！ 医術に携わるものとしては少々認められない部分があるが簡単には死なんぞ？ ほれ？ もう回復したようだ」

華佗の言う通りですか？

『ムクリ！ スタタタ！』

「ちょっといきなりなんてことするんだアアア！」

「そうよそうよ今のなんて私一瞬心臓が止まったわよ！」

まあアレはそういうブローだしな？ つうか詰め寄るなつつうに？

「次は一瞬じゃすまないよ」

『ギュル！ ヒュボツ！！』

素振って牽制！

「ひい！怖い！怖いわコノ子！」

「うむ！鬼まさに鬼！鬼人恐るべし！」

鬼人鬼人言うなつうに？諦めたけどアレな感じはアレな感じなんだから？

つうかマッソー同士で抱き合ってるその映像のが怖いと思うんだがコレいかに？」

「確かに不気味だな？」

「子供にはとても見せられない光景だな？」

「スマン・・・俺の旅の仲間なんだ・・・なんかスマン」

どうやら口に出てたらしい上から順に白蓮、星、華佗の順でした。

そして

「スマッシュ！」

『ズバン！』

「せんどー！」

「ガゼル！」

『ガドンッ！』

「いっぽオオ！」

詰め寄り↓撃退を繰り返す俺と貂蟬と卑弥呼でありました。

でその後は目的地が違うため別れることにその別れぎわ貂蟬に

「アナタは・・・この世界のことをどう思う？」

と聞かれたんで

「俺からいわしゃ異世界だな？」

「異世界？アナタがいた世界とは別という意味かしら？」

「そっそ！世界は広いってな？色々な世界があらあな？ココみたく男が女だったりな？まっ同じ名前の別人って感じか？似たような世界だけんどやっぱし別？みたいな？」

「そう？アナタはコノ世界でどうしたいの？」

「さあ？俺は俺として生きるとしか言えねえな？まっ今んところは白蓮さん家の政成君として頑張りますわい？」

「フフ・・・そう頑張りなさい？何か困ったことがあったら力になるわ？」

「ン！あんがとよ？オマエらもなんか困ったことあったら手助けせんぜ？オマエら面白えしダチだしな？」

といった感じの会話をして別れました。

その際に

「卑弥呼く式には呼べよう？派手な衣装作ってやつから？」

と言っておくのも忘れません！紳士だから

「イヤン！照れるぞ政成ちゃん？」

「ちょっと待て！政成殿！式ってなんだ式って！」

フツ・・・華佗よわかってるくせに？とか思いつつも手をひらひら振って別れました。

ってそういや・・・卑弥呼んやつダーリンって・・・何故に横文字知ってたんだ？

「マサ早くいくぞ？」

「おっ悪い！」

まっいいさね？そういうこともあらあな？ってことにして白蓮と星の後を追うのでありました。

・
・
・
・

貂蟬視点

「やはり彼は？」

「ええ『外史』の外から来たみたいね？」

華佗の質問に頷きながら答る。

外史・・・本来の歴史とは違う歴史ってところかしら？故に正史とは違い男性が女性として逆に私や卑弥呼のように女性が男性として存在をしているわ？

彼の言葉を借りるなら似てるけど違う世界ね？

フフ・・・いいえて妙ね？そう言われて私も思わずハッとしたわ？言ってしまうえば異端の歴史けど・・・

似ているけど別・・・同じではない・・・そうよね？私達は私達として存在し生きている。

それでいい！そう素直に思わせる何かは彼にはあったわ？

それに彼自身がその身に内包してる力も異端・・・いえ・・・それ以上の物・・・きっと彼自身がいた世界でも。

けど彼は彼としてその力を隠すでもなく奮ってきたんでしょよね？

「むむ！貂蟬ちゃん？彼のこと相当気にいつてるみたいじゃな！確かに彼面白い子だったなダーリン？」

「うむ我が五斗米道ゴッドウエイドォーの発音も完璧だったしな」

そこは関係ないわよ華佗ちゃん？ 気持ちはわかるけど？ 今まで最初からちゃんと発音してくれた子居なかったものね？

「次に会う時彼はどういうふうに・・・いえ違うわね？ 彼の周りがどういうふうになってるのか？ ね？」

彼自身はきつとあのまま・・・けど周りは変わっていくんでしょ
うね？

ウフツ・・・今度はホントに夜の

『ヒュン！ ドボスッ！！』

「うっぷす！！」

『ドサッ』

硬い何かが・・・高速で私のお腹に・・・

「ヌオオオ！ 貂蟬ちゃん貂蟬ちゃん！！」

『コロッ』

「ふむ石だな？ ン？ 『お断り！ マサ！』と書いてあるな？」

マサナリちゃん・・・なんて地獄耳・・・ガクリ・・・

「貂蟬ちゃん！ 貂蟬ちゃん！！ しっかり！！ ほらヒッヒッ
ツフー！ ヒッヒッフー！」

「卑弥呼？別に産まれるわけじゃないからな？」

・ ・ ・

マサ視点

はいもうちょい続きます！前回もかなり短かったし？

とメタな発言はコレまでにして

「でマサ？先に行くところは決まったのか曹操のところか孫策のところか？」

白蓮さんの言う通りそろそろ別れ道・・・ってわけじゃないけど決めにゃあな？まっどつちも行くっちゃ行くんだけんどね？

さて・・・

「私としては曹操殿のところに先にいきたいのだが？白蓮殿のところに来る前に一緒に旅をしていた友がいるはずなので」

ほう！

「じゃそれで！突撃！曹操さん家の晩ご飯だ！」

「本気でしそうだなマサのやつ？」

「するでしようなあアノ目は？」

まああわよくばだけどね？

つうわけで曹操さん家に向けて出発！

途中でやっぱし山賊やら盗賊やらの襲撃を受けたりしたけどそこは三人で無双しました！

である村が見えてきて今日はココに泊まりまっしょい！とのことになり村に入ったら

『ブオオオオン！』

デカイ鉄球が襲ってきました！しかし

S・G・G・Kスーパークレートゴールキーパーマサをナメるなよ！

『パシンッ！』

ガッチリキャッチです！

「帰れ盗賊！ボク達の村の食べ物はやらない！」

って？女の子？鉄球を投げたのは小さい女の子でありました？

つうか

「盗賊ってオマエ・・・盗賊って・・・俺盗賊っぽい？」

「まあマサはどちらかというと・・・」

「ガラが悪いですからな？ 初見ではそう思われても仕方がないので
は？」

確かにガラ悪いけどね？ 職質とかされたことありまくりだしね？

「ン！ ツン~~~~ 離せ~~~~ ボクの鉄球！」

いやさ

「離れたらまた投擲すんだろオマエ？」

「当たり前だ！ コレ以上村の食べ物を盗られてたまるか盗賊！」

はぁ？ つうか

「俺ら・・・盗賊じゃねえよ？」

「嘘だ！ オマエ凶暴な顔してるもん！」

グッサリ・・・うわ・・・キツ・・・

「チクソウ・・・確かにさ俺目つき悪いとか言われるよ？ けどさそ
んなに真っ直ぐ凶暴な顔って言わなくてもさ・・・ヤベッ泣きそう」

「えっあっ！ ごつごめん！ 言い過ぎた！」

へへ・・・いいのさ？ どうせ俺なんて・・・俺なんて・・・

・ ・ ・
と暫く俺が凹んでる間に白蓮さんと星さんが誤解を解いてくれました。

俺はもちろんミ○ミ○の力で気持ちを立て直しました！

流石はミ○ミ○だぜ！

でアノ鉄球っ娘も

「兄ちゃん美味しいねコレ！」

ミ○ミ○飲んです！ミ○ミ○のよさがわかる良い子さんでした！

ちなみに名前は許緒です！あっ一応俺らも自己紹介はしといたぞ？その時やっぱし

「嘘！兄ちゃんがアノ鬼人！！」

って驚かれました・・・順調に広まってるようですチクソウ・・・

まっそれは置いておいて

「許緒君や？さっき盗賊がどうたらつってたけど・・・出るの盗賊が？」

「うん・・・少し前から・・・県令様に助けを求めているんだけど中

々来てくれなくて・・・それで戦えるのボクしかないから」

ふん？

「何してやがんだか？ココの県令様は？白蓮さんたあ大違いだね」

「私のところは嘆願が来る前にマサが潰してるだろ？アノ辺り山賊も盗賊も野盗の類は全滅してるからな？だから私も出てこれたんだし？」

「ですか？幽州の辺りでは野盗は鬼に喰われるとされて野盗の類は一切近付こうとしませんからな？」

いやさ？俺って一体何？

「えっ兄ちゃん人を喰べるの？」

オイコラ！許緒！喰わねえ・・・いや待て？あえて

「そうだぜい？許緒くくく喰っちゃまうぞ！オラアアア！」

「わあああ！！！」

『タッタタタタ！』

「待てオラアアア！ダハッハハハ！」

「キヤアア！」

追いかけてっこそスタートです！

まあ許緒君はかなり必死に逃げてるけど？でも顔は笑っております！

「マサも子供だよな？」

「だからこそ子供にも好かれるのでしょ？」

生涯悪ガキ目指してますから？にして星？『も』ってなんだ？『も』って？

・
・
・
・

許緒視点

今日村に来た三人の人達。

一人は幽州の県令様で公孫賛様

そしてそこで客将をしている趙雲の姉ちゃん

それで最後は兄ちゃん鬼人・政成。

兄ちゃんは顔はちょっと怖いけどホントは面白くて優しい兄ちゃんボクの勘違いで攻撃しちゃったんだけど許してくれたし。兄ちゃんとの追いかけてこの時はボクは久しぶりに笑った気がした盗賊が出るようになってから暫くこんなふうに笑ったことはなかったな？

えっとそれでボクは勘違いのお詫びについてボクの家泊めること

にしたその時兄ちゃんが料理を作ってくれたんだけど凄く美味しかった。

で寝る時になって趙雲姉ちゃんが

「さて許緒？子供はそろそろ寝る時間ですぞ？ここからは大人の」

って言い出した瞬間兄ちゃんが

「許緒の教育に悪いだろボケ！寝てろ！」

『キュッ！』

「うっ・・・」

『ドサッ』

ってあっという間に趙雲姉ちゃんを締め落としてた

ホントはボクそこまで子供じゃないから意味はわかるんだけど？

「星・・・ちよつとは懲りろよ？」

「いつもこうなんですか公孫賛様？」

「大概な？」

へこたれないんだね？趙雲姉ちゃん？見習おうとは思わないけど？

でもボクも兄ちゃんと一緒に寝たいな〜って思ってたら

「別にいいぞ？ スッパとかじゃなきゃ？ 前いたところじゃしょっちゅう潜り込まれてたし？」

って言われた！ 裸じゃなかったらいいんだ？ って不思議に思ったけど折角だからって兄ちゃんの布団に潜り込んだ。

その時公孫賛様が

「う・・・羨ま・・・いやいやでも恥ずかし・・・いやいや・・・」

って真っ赤な顔してなんかクネクネしてたのが少し怖かったけどでも兄ちゃんはおカポカポカしてて凄く安心できて直ぐに眠ることができた。

そして夜フと目が覚めたら兄ちゃんが出ていこうとしてた

「むにゃ・・・兄・・・ちゃん？」

「悪い起こしたか？ ちいと喉が渴いてな？」

そう言っただけの頭を撫でて出ていった・・・水なら汲んであるのに？ って思ったけど頭を撫でられたのが気持ちよくてまた直ぐに寝てしまった。

そして翌朝

良い匂いがして起きたら兄ちゃんもう起きてて朝ご飯を作っているところだった

早起きだな？ 兄ちゃん？

「おは？ 許緒？ ほれ顔洗ってきな？ 女の子だろう？」

「うんわかったおはよう兄ちゃん」

兄ちゃんにアイサツして顔を洗いに・・・そしたら

「許緒ちゃん来てくれ！」

慌てた様子の隣に住んでるおじさん・・・まさか・・・また来たの？

一気に目が覚めると同時に頭に血が上る武器を持って急いでおじさんに着いていく兄ちゃんも一緒に着いてきてくれた

「アレ？ つかしなあ？ 新手かよ？」

って言ってたけど何のことだろう？

「件の盗賊か？」

「朝から鬱陶しいことこの上ないですな？ 折角の政成の朝食が冷めてしまう」

公孫賛様に趙雲姉ちゃんも異変を感じて来てくれたみたいだ。

趙雲姉ちゃんの言う通り兄ちゃんのご飯が冷めるのは・・・許さない！ 絶対に！

より一層そんな気持ちになる食べ物への恨みは怖いんだぞ盗賊！
そんな気持ちを籠めて目についた盗賊の頭みたいな人を目掛けて！

「ハアア！」

『ブォン！』

鉄球を投げ付ける

『ガキン！』

！？

また防がれた！兄ちゃんと違って剣でだけど！

でも掴まれてるわけじゃないから

『グッ！』

鉄球を引き寄せてもう一度投げようとしたら

「許緒！ちよい待ち！」

兄ちゃんに止められた、なんでって兄ちゃんの方を見たら

「多分アレ盗賊じゃない？多分？だよなアア？その・・・なんか
アホの子みたいな人？」

「誰がアホの子だアアア！」

『ヒュン!』

ボクの鉄球を受け止めた人が兄ちゃん目掛けて剣を振る! 危ない
って思ったけど兄ちゃんは

「素手バリアっ」と

『ガキン!』

「何イイイイ! 素手でエエ!」

噂はホントだったんだ・・・兄ちゃん凄い?

「やっぱ驚くよなアレ?」

「私達は慣れましたが? 初見では驚くでしょうな? 政成のアレは?」

公孫賛様に趙雲姉ちゃんは慣れてるんだ? っていうか普通は驚く
よ?

そう考えてる間も

「この! このオオオ!」

「はいはい頑張れ頑張れ」

『ガキンガキンガキン』

まだ続いてた

それから暫くして

「軍の人だったの？」

「ああ。この村に出る盗賊を討伐しに来た！」

兄ちゃんに斬りかかった人の正体がわかってボクは慌てて謝った。

「許緒君はアレだな俺ん時もだけど少しは確認した方がいいと思うぞ？」

「うううごめんよ兄ちゃん」

「まっ真っ直ぐで俺は好きだけどな？」

ふえ？

「ホント？」

「おう！マサさん嘘・・・つく！けどコレはホントよ？」

エヘヘ？ちよっと・・・ううんとっても嬉しい。

「つとさっきは悪かったな？名前わからなかったもんでよ？ついイメージで？侘びに朝メシ・・・許緒いいか？」

「いいよ？ボクも悪いことしたし」

「よしや！朝メシ食わすから？許してくんろ？広～い心で？」

兄ちゃんの頼みに軍の人は

「私は心が広いから許してやる！決してお腹が空いてるわけでは」

『グー』

あつ軍の人のお腹が？みるみる赤くなる軍の人。

「失敬！腹減りすぎて腹なっちった？朝メシにしようや？」

「うっ・・・うむ」

兄ちゃん優しい！

でボクの家で軍の人も混じって朝ご飯、やっぱりとっても美味しい冷めちゃったのが残念だけど。

「それで軍の者といっていたが・・・ふむ・・・その大剣・・・察するに曹操殿の軍の・・・夏侯惇殿では？」

「ハグハグ・・・いかにも・・・美味しいなコレ？お代わりは」

夏侯惇・・・嘘？夏侯惇様？

「はいよ？いい食いっぷり見てて気持ちいいねえ？許緒は？」

「食べる！」

「うむうむ！食は元気の源ですってか・・・ってン？なあ星？今・・・夏侯惇つった？更に曹操軍とかも？」

「言ったぞ？」

「おう！ビンゴ！当たりってか？」

当たり？どういうこと？

「私達が向かう予定の場所・・・曹操のところに行くところだったんだよ」

「むっ何故だ？」

「有名人の顔を見に行こうつつう野次馬根性？ヒマだったんよ？」

そっ・・・そんな理由で？

「兄ちゃん本気？」

「おう！本気も本気！」

兄ちゃん・・・兄ちゃんも少しは考えた方がいいと思うよ？県令の公孫賛様まで連れ出して・・・

「許緒君？何？そのアレな奴を見る目は？夏侯惇も一緒になって？」

だって・・・

「こういうヤツなんだよマサは？」

疲れた顔でそういう公孫賛様色々凄い兄ちゃんだった。

「むっ？　そう言えばまだオマエ達の名前を聞いてなかったな？」

あっそう言えば！

「公孫賛だ」

「趙雲」

「許緒です」

公孫賛様、趙雲姉ちゃんボクの順で名前を言い最後に兄ちゃんが名前を言う時になったら

「夏侯惇様！　放った斥候が帰ってきました！」

夏侯惇様の部下の人が盗賊のアジトを突き止めてきたみたい。

ボクも戦うつもりでいたから気を引き締める。

「むっ！　盗賊の数は？」

「ハッ！　それが・・・既に盗賊は全滅しておりました・・・」

えっ？

「何ィィ！　どういことだ！　詳しく話せ！」

「ハッ！斥候が盗賊のアジトを突き止めたところそこにはクビだけ土の上に出ている状態で盗賊団が・・・」

そこまで夏侯惇様の部下の人が話した時にいきなり

「プッ・・・ハハハ！なるほど・・・それはきっと・・・恐ろしい鬼が出たのでしょうな？白蓮殿？」

「プッ・・・だな？怖くて変わった鬼の仕業だろうな？」

って趙雲姉ちゃんと公孫賛様が笑いながらそう言い出した。

そこでボクは昨日の夜とさっきの兄ちゃんの言葉を思い出した。

まさか・・・

「兄ちゃん？」

「ン？さあてね？つとまだ名前言ってなかったな？夏侯惇？」

「あっああ」

目を丸くして兄ちゃんを見てる夏侯惇様に兄ちゃんは

「鬼島 政成だ？マサかマサナリでヨロシクな？」

ニツと笑いながら名前を言う。

「鬼島・・・政成・・・まさか・・・オマエ・・・鬼人！！」

「残念ながらね？？つか鬼人言うなちゅうに！」

驚いた顔の夏侯惇様に暢気な兄ちゃん・・・

鬼か・・・鬼は怖い物だって思ってたけど・・・

ボクの村に来た鬼は強くて優しくて面白い変な鬼の兄ちゃんだった・・・

村を助けてくれた優しい鬼・・・

「兄ちゃん・・・ありがとう？あのね？ボクの真名は季衣」

「なんのことやら？でもまっとう致しましてと言っておくぜい季衣？」

その強くて優しくて面白い変な鬼の兄ちゃんにボクは真名を教えただ。

第四幕のような様子! (後書き)

後書き

なんか勝手設定とかやっちゃまった感じですよ。

時系列もキャラも以下略・・・

次回は霸王さん登場・・・の予定・・・

頑張りますんでまたお暇なら覗いてやって下さい。

感想などありましたら是非に

第五幕のような様子! (前書き)

前書き

やっぱりキャラが壊れております。

口調も変・・・

それでもいいよ大丈夫! という方はどうぞ。

第五幕のような様子!

『トンテンカンテン!』

「うっし! 終わりっと! 季衣~~~~次は~~~~?」

「もう終わったの兄ちゃん!?!」

「見ればわかるべさ?」

「ホントに終わってる! 兄ちゃん凄ーい」

よせやい照れらァ。

ン? 俺が何をしているかと? うむ察しの通り大工のマサさんやっています。

盗賊共^{ボケ}んせいで壊れたりしてる家とかあったんで? 血が騒いだのだ!

まっ曹操さんもこの村に来るって夏侯惇も言ってたし待ってる間ヒマだったつうのもあっけど。

あっ後、許緒の村の皆さん盗賊共^{ボケ}を潰し・・・ゲフンゲフン盗賊共^{ボケ}がもう村に来ないとわかってから俺のことを鬼人様鬼人様とか言い出したんで。

「やめれ? 普通にマサとかマサナリって呼べつうに!」

つっといた、したらなんやかんやで鬼人様と呼ぶのは止めてくれました。

流石になんかアレだったし。まあ

「鬼人！早く私と手合わせしろオオオ」

夏侯惇は鬼人っていいやがるけど。

「鬼人言うなつってんだろオ！何回言ったらわかんたボケエエエ！つか手合わせ手合わせって後でやるつってんだろうが！だからオマエはアホの子なんだ夏侯惇！！」

「まったくアホの子と言ったなキサマ許さアアアん！」

はあ・・・しゃあねえなあ。

『ヒュッ！』

「なっ消え！どこだ恐れをなして逃げたかッ！」

逃げるかっつうに基本俺は喧嘩は買いなんだからよ。

N I N J Aで背後に回っただけだっうの。

『トントン！』

「ぬぁ！？いつの間に」

「お休み？」

『ガゴッ!』

強めゲンコ!二時間コース。

「へぶっ!」

『ドサッ』

なんか随分面白え態勢で崩れてるがコレでよしと。

「白蓮く星くコイツそこいらの芝生にでも転がしといて?うるせえから?」

「あのなく一応コイツの部下が見てるんだぞ?」

「ですか?睨まれていますのぞ」

確かにめっさ睨まれとりますな?がしかしそこはマサさん紳士だから。

「なんぞ文句であんのかいアアくん?」

『ザッ!』

「」「滅相ありません!!」「」

うむ紳士的な対応だったな紳士紳士。

「さって作業に・・・ン季衣どったの?」

「兄ちゃん今の顔スッゴい悪人だったよ？」

グハッ・・・何故に紳士だったろ？確かにちよつとだけメンチきつちやっただけど紳士だったろ？

「まあアノ目で睨まれたら一たまりもないよな？」

「鬼の眼光ですな？」

チクソウ・・・そんなにアレだったかしら？つか今の寧ろ俺悪くなくね？悪いの夏侯惇じゃね。

まっいいさね。

「は～い作業に戻りますよくギリギリ働けギリギリ」

「」「ウッス親方!!」「」

いや親方って・・・ここでも親方かよ？まあいいけど。・

・
・
・

で二時間後、修復作業もあらかた終わりそろそろ夏侯惇が目覚めるころです。

「ハッ！」

うむ目覚めたようですなバツと起き上がり辺りをキョロキョロ、あっ目が合った。

「鬼人オオオ!!」

一直線に切り掛かってきてますね? つうかね・・・うん。

ヒョイとかわしてスツと体に巻き付きます、ええそうですね?

「鬼人言うなっつうにオ・マ・エ・は!!」

『ギチギチ』

コブラツイストです。

「あだだだ!ぬう離せエエ鬼人オオオ」

コイツは・・・

「グランドコブラに移行だオラアア!」

『ザッギチギチギチ!』

「ぐあああ~~~~」

締め付けレベルもアップ中。

「鬼人言うな? マサかマサナリ? おけ?」

「桶ではない夏侯・・・ぐうう」

あっそうだった横文字通じねえんだったわ? 白蓮とか星とか幽州

の奴らにはちょこちょこ教えこんではいるけど。まっ『おけ』も正確には『OK』だけど。

「おけは・・・わかったとか了解とかいう意味ね？で？おけ？夏侯惇君？」

「おけ、おけ！わかったから離せエエマサナリイイ！」

うむうむようやくわかってくれたようで、では。

『バツ』

解放・・・

「つつつ・・・フツ・・・フハハ！油断したなアアア！」

した瞬間再び切り掛かってくるアホの子。
ヒョイとかわして腕を掴み。

「しゃらアアア！」

「ぬああ！」

一本背負い・・・からの~~~~

「あらよツと！」

『ギチギチギチ！』

腕ひしぎ十字。

「いたたたッ！離せ！離せエエ」

「離れたらまた切り掛かってくんべさ？ギブ・・・あっ参ったね？しろ？」

「イヤだアアア！私は負けエェん！」

あらまあ根性あんなコイツ？ではでは。

『ヒュルツギチギチギチ』

逆エビ固めに移行。

「ギブ？」

「ぐう・・・いや・・・だ・・・」

なんて負けず嫌いな？まっ俺もだけんど。つうわけで禁断のアレを使うか？

バツと両足で夏侯惇の足を固め左手で両の腕を後ろに回しガツチリロック。

「なっ何をする気だ！」

自由は奪ってるけどキメてるわけじゃないから『今』は余裕があるようです。

「ギブならいまのうちだぞ夏侯惇？」

「参ったはせん！」

そうか・・・

「残念だ・・・」

実に残念だよ夏侯惇君・・・空いてる右手で・・・

「うつ・・・クツ・・・アハハハハ！ちよやめアハハハハ！！」

くすぐりまくりの刑です。

まっコレもどつかでみたパクリだけど。

「ゲフツハハ・・・やめ苦し・・・ブハッ！アハハハハ」

効果は高いようだな。

「フハハハ！このまま笑い失神という愉快的失神の仕方をさせてくれるわアアア！！」

「やめ・・・ハハハ・・・参っ・・・ゲホッ・・・」

「何を言ってるかわからんなあ？」

フハハハ！！

「むっむっい・・・」

「兄ちゃん色んな意味で凄いよ・・・」

「ああ確かに・・・しかし・・・夏侯惇殿、政成にアレだけ密着少々羨ましい」

上から白蓮、季衣、星の順でした。

「ギッ・・・ギ・・・アハハハハ・・・助け・・・ブハハハ」

・
・
・
・

「ハアハアハア・・・死ぬかと思った・・・」

息も絶え絶えグッタリ手を地面につけてる夏侯惇。

流石に失神するまではやりませんでした。

「俺勝利ってことで？」

「クッ・・・今は勝ちを譲ってやる今は！」

あらあら負けん気の強いこって？

「政成次は私達との手合わせだぞ？」

ン？　そういや今日はまだだったな？　どれ。
「いらはい。」

チヨイチヨイツと指を曲げて星と白蓮にそういます。

最近は二人同時に相手してますねん。

「あのくすぐりはないよな？」

「おのぞみならしてもいいぞ白蓮？」

「結構だッ!!」

『ヒュッ!』

白蓮の斬撃と

「むっ・・・悩むなッ！」

『シュバッ!』

星の突きの同時攻撃。

まっサクッとかわしますけどね。

「シイッ!ハッ！」

「フッ!ハア！」

『ヒュババババ』

うむうむ中々コンビネーションが出来てきとりますな。

まっ

「そう簡単には当たらん」

「貰ったアアア！」

って夏侯惇・・・オマエも混じるんかい。

『ヒョイ』

「まっ当たってはやらんけど？」

でそれからは白蓮、星、夏侯惇の斬撃やら突きやら薙ぎ払いやらをかわしてかわしてかわしまくり・・・

「はい終了～～」

「ハアハア・・・くっそ～～やっぱり当たらないか三人掛かりだったのに」

「フウフウ・・・まあそう簡単に当たってはやり甲斐がなくなるでしょう目標は高くなくては」

「ツ～～～何故・・・私だけ・・・最後ゲンコツなんだ・・・」

いやさ夏侯惇？何故って急に斬りかかってくるからだっつうに。

「季衣は参加しなかったんな？」

「う～ん手合わせもいいけどボクは兄ちゃんと手合わせするより追い掛けっことか・・・えと・・・」

ン？何をチラチラ見て・・・むっ？なるほろねえ。

俺らん手合わせつうか俺的にはいつもの運動の見物に来てた軍の人達と村ん人達の中に親子連れ。

まっここまで言えばわかるやね？

ようするに。

「よっと！」

ヒョイと季衣を持ち上げて

「わわッ！」

肩車です。

「どうよ？世界が違ってみえるべ？なんつってな？」

「エへへ兄ちゃん～～」

うむうむ下から季衣の顔を見てみたらめっさ笑顔ナイススマイルだ。

「アレが巷で恐れられてる鬼とは」

「優しい鬼だろ？」

「変わっていますかな」

別に優しかねえつうに。つか鬼でもねえから多分。

一応カテゴライズ的には人間だと思われまます自信ないけど。
あつても変わってるつう部分は認めます。

「さあてゝ昼メシにすんべ？」

「うん！」

季衣を装備したまま季衣ん家へとスツタラスツタラ。

もちろん白蓮、星、夏侯惇の三人もついてきてます。

で昼メシ食って。

「まだ曹操来ねえな？」

「ええいマサナリ！様を付ける様を！！」

「いやザンス！なんで様付けせないかんのじゃい！」

全く夏侯惇君は口うるせえです。

「夏侯惇マサにそんなこと言っても無駄だから疲れるだけだぞ？」

「そうだなそれに政成が様を付けるなど・・・ふむ・・・似合わないことこの上ないな」

うむうむ白蓮さん星さんの言う通り。

「まっそういうわけでカンベン？大体苦手なんだよそういうんはよ？」

「苦手とかそういう問題では」

「俺にとっちゃあそういう問題なんでござえますよ？あきらめれ」

その後もギャーギャー言ってくる夏侯惇君をテケトーにあしらいつつ時間を潰していたら。

「夏侯惇様！曹操様が到着しました。」

どうやらよくやく到着のようすな。

『ガタッ！』

「華琳様アアア！！」

うおッ！夏侯惇一直線。

「って華琳って真名？」

「マサ・・・あうと！今は曹操いないからいいけど迂闊に呼ぶなよ？真名は神聖なんだから」

むっ白蓮さんに怒られた。

「ですか？少々迂闊だぞ政成？」

「そうだよ兄ちゃん」

星に季衣まで・・・

「すまなんだ！ 俺んどこじゃ真名なんてなかったかんよ？ 今後はなるたけ気をつけるように努力はするけど力及ばないこともありにけり？」

「ハア〜〜まっ気をつけてくれよ？」

うむ気をつける、なるたけ。

「アレそういえば兄ちゃんってなんで真名を知らないの？ それに他にも」

あっそーいや季衣には言っただけだったっけか。

「白蓮ヨロシク」

「なんで私！！ まっいいけどマサはカクカクシカジカなんだよ。」

はい白蓮説明どうも、コレからも説明は白蓮に任せよつと。

「兄ちゃん天の御使い様だったの？」

「違うぞ許緒、政成は変な御使いだ！」

星さんそれはちよつとないんでね？ まっいいけどね。

「ああゝゝわかるわかるよ兄ちゃん！」

季衣も納得してるっぽいしね。

「あっ一応言っとつけど俺がいたところは天の国でも変の国でもねえからな？」

まっ多少はアレだったけど。

つとイカンイカンここでコチャコチャやってたらいつまでたっても曹操さんの顔が見れないやんけ。

「じゃ行くべ突撃！ 曹操さん家の晩ごはん！！」

家まで推しかけてやんぜい。

で外に出てキョロキョロ見渡してみれば、夏侯惇発見！ むむ？
何やら報告しとるようすな。

報告してる相手はなんかデカイ鎌持ってるツインドリルさんあつ髪型ね？ まっ察するにアレが曹操か・・・スッタラスッタラ近付きつつ。

「ゴクリ・・・凄えなこの距離でもビシビシ伝わってくるぜ」

ピクッ！ 俺の眩きが聞こえたのか夏侯惇が反応。

「ハッハッハ！ わかるかマサナリ！ 華琳様の身に纏う覇気！」

なんか嬉しそうに自慢してきました。

「まっ確かに曹操はそういう雰囲気があるよな」

「まさしく英傑のそれですな」

「うんボクにもわかるよ」

いやさ俺が言ってんのは。

「間違いなくツンデレだわアイツ間違いねえって？」

ってことなんですけど。

「つ・・・つんでれ・・・とは何かしら？」

おや曹操さんコメカミの辺りがピクピクなっとなりますな。

コメカミピクピクはスルーしつつ

「『べっ別に深い意味なんてないんだからね！勘違いしないでよね！』とか言うような人のことです。　なんかオマエすんごい言いそう」

やっぱしキモいな俺がやると。

「マサナリィィ華琳様に失礼だろオオオ！それに華琳様はキツイ任務を与えて『フフ・・・アナタなら出来るわ？　期待してるわよ？』

』というような感じだアア！」

あっなるほどそっちタイプなんだ。

つか

「それ悪女じゃね？」

「違アアう！ 任務をやり遂げた後にくる『アナタに任せて正確だったわ』という落差がいいんだろ落差が！ 何故わからアアン！！」

むっ？ 確かそれはツンデレ要素だな。

「まっぶっちゃけわかりたくねえけど？」

「何イイ！！ 華琳様！ 華琳様からもマサナリに何か言ってやってくだ・・・あっ！」

ン？ どうした夏侯と・・・あっ。

「フフ・・・春蘭？ 後でお仕置きね？ 秋蘭！ アイツを射なさい！！！」

あらやだ怒っとなりますがな。

「ハッ！！」

『ギシッ』

そして弓ガッツリ構えられとなりますがな。
期待を込めて白蓮達の方を見てみた。

「公孫贊様止めなくていいんですか？」

「マサだし大丈夫だろ？　それに」

「自業自得ですしな？」

なんかある意味信頼されとるし！

では夏侯惇は・・・

「お仕置き・・・ゴクリ・・・ハアハア」

思った以上にアレな子だった。こりゃイカンわ。

ちいとだけ夏侯惇が心配になりました。

『ヒュッ』

って心配してる間に放たれとるし。

『パシッ！』

「今完全にヘッドショットだったな？」

ガッツリ殺^とりにきてたなオイ、まっガツチリキャッチしたけど。

「なっ！秋蘭次ッ！」

「ハッ！！」

おうビックリしますな？ 即効で次の矢ブツ放そうとしとるけど。

このまま昔懐かしき矢ガモならぬ矢マサ事件になってしまう、まっ刺さらんけど。

『シュバツ』

N I N J A。

「はっ？ どこに！？」

キヨロキヨロしてる曹操に。

「ン？ 誰か探してんの手伝おっか？」

「ええお願い・・・って探してるのはアナタよ！！」

まあまあそれはそれは。

「やったな！探し人見つかった！！」

グッとナイススマイルでサムズった。

「フフ・・・そのクビがついてるのも今日までよッ！！」

おう？

『スカッ！』

「えっ？ アレ？ 私の『絶』が？」

ン？ 『絶』はて？ あっコレか。

「お嬢さんの探しものはコレですか？」

後ろ手に持ってた鎌を曹操さんの前に出してゆらゆらさします。

「はっ？ いつの」

「オマエが鎌で斬りかかってこようとした時？」

サクッと掠め取りました。

何時もの如く『素手バリア』でもよかったんだけどね。

「ちょッ！ 早く返さない！」

ふむ・・・

グッと頭、デコの辺りを手で押さえ付けて。

「ほれほれ頑張れ取ってみさせ？」

鎌は手を高く上げて曹操からは届かない位置へ。最初はピョコピョコジャンプして取ろうとしてたけど俺が頭を押さえ付けてんで全然届きませぬ。

「ちょッこの！！シッ！」

おっバシバシ蹴り出した。

まっ効かないけどね。

「フハハハ！ どうしたどうした曹操？返して欲しいか？ 返して欲しいくば・・・俺達を晩メシに招待しろオオオ」

なんだかんだで『突撃！曹操さん家の晩ごはん』をあきらめてないのです。

「なんで！『ガスッ！』私が『ビシッ』アナタみたいな『バシッ』変なヤツを夕食に招待しないといけないのよッ！『ズドッ』」

むむ曹操しぶとい。

「兄ちゃん・・・ちよつとそれはどうかなって思うよ。」

おう？季衣に呆れられてるっぽい。

「あっ私アイツとは全然関わりないから他人だから」

白蓮には他人のふりされてるし。

「クク・・・あの曹操殿に・・・やはり政成は面白い」

星は面白ろがってるけど。

まっ季衣の言う通りちよつとアレだわ、つうわけで。

「じゃこうするべ？ 曹操君にこの鎌を返すわ？ で鎌を俺の腕に当てた状態で俺の腕を落とせたら曹操の勝ち、落とせなかったら俺の勝ち！ 曹操が勝ったら俺の腕が落とせてスツキリ！ 俺が勝ったら晩メシどうよ？ やる？」

まっちよつとインチキ臭えけどガツチガチだし。

「フッ何を言い出すかと思えば・・・私が鎌を引かないでも思ってるの？」

おっ乗ってきたな？

「『引かない』とは言わんけど・・・」

曹操に鎌を返却し右腕を前に出す。

『スッ』

直ぐさま俺の右腕に当てる。

「華琳様！ あのお耳に入れたいことが！」

む？ 夏侯惇・・・俺のカッチカチっぷりを言うつもりか。

「春蘭後になさい！ フッ！！」

あゝらら聞いてた方がよかったのに。

『ガキンッ！』

「『引けない』だろ？残念！落ちなかったねえ？」

「はぁ！？」

『ガキン！ ガキン！ ガキン！』

フツ・・・何度試しても一緒ですよ。

「このッ！なんでッ！有り得ない」

「華琳様・・・この男・・・マサナリは鬼人です。」

おっ夏侯惇ネタばらし？ って鬼人言うなつうに。

「なっコイツがッ！あの鬼人！！まさかホントに居たなんて噂じゃなかったのね・・・春蘭！なんでそれを早く・・・いえ聞かなかったのは私ね・・・」

おっ曹操さん！ 責任転嫁しないとは・・・やるな曹操！ 好感持てますわ。

「アナタ・・・何してるの・・・」

ン？ おう気付いてたら撫でてた。

「クセだ！ 無意識に撫でてた！」

「クセって・・・人の頭を気安く・・・」

「まあまあそう怒りなさんな？　　つとで晩メシは？」

「クッ・・・約束は約束よ仕方ないわ」

よっしゃ！

「白蓮くく星くく季衣くく曹操さん家で晩メシだぞくく」

クルつと振り返って三人に呼びかけます。

「ホントにやったよマサのやつ・・・」

「ハハハ流石は政成！　コレだから政成といると面白い」

「兄ちゃん無茶苦茶だよ」

ハハハ！　まっそれがマサさんつてもんでごぜえますよ。

つとそうだった。

「まだ名前言ってなかったな？」

「知ってるわよ・・・鬼人・・・鬼島　政成でしょ？」

「鬼人言うなつうにマサかマサナリね？」

もうこのやり取り定番になりそうだわ。

「わかったわマサナリね」

うむうむ、それでよし。

でその後は白蓮達も自己紹介その時やっぱし白蓮。

「公孫賛 アナタ幽州の県令でしょ？ 何してるの？」

「言うな・・・気付いたら旅に出てたんだよ」

とツツコミを頂戴してましたので

「負けんな白蓮！」

応援してみた。

「オマエが言うなオマエがッ！！」

ナイスツツコミ！ この流れ仕様です。

「苦労してるわね公孫賛・・・鬼人がこんな変なヤツなんて思わなかったわ」

「しかも自覚あるから余計にタチが悪いんだよな」

ジーッと二人に見られた。

「頑張れその苦労がいつかきつと役に立つ時がくるさ！！」

ニカッとナイススマイルでサムズ。

「皮肉も通じないってホントにタチ悪いわ」

言われなれとるしね人間慣れるもんなんですよ。

「そういえば姉者盗賊はどうなった」

おうさつき俺に弓を射ってたヤツなんかクールっぽいな、にして
も姉者？

「私が来た時には盗賊は全滅してた・・・マサナリの仕業だマサナ
リの」

どうやら夏侯惇の妹さんらしい。

「釣り合いとれとるね？ 後俺は知らん！ そういうことにしとけ
！」

空気が読めないやつめ。

「ええ～～でも盗賊やつつけてくれたの絶対兄ちゃんだよ？」

むむ季衣まで。

「まっ一晚でそんなことを仕出かすのは政成くらいだな」

むむむ・・・星。

「マサ？ 白状しろ？ 言ったら楽になるぞ？ カツ丼だったっけ？
食うか？」

白蓮・・・いつの間にそんな技術を・・・そんなんされたら。

「す・・・すみません・・・俺が・・・俺がやりました」

素直に白状するしかありません。

「よく話してくれたなマサ動機はなんだ？」

「すみません！ すみません！　なんか気にらなかったんす！
いカッとなってでも後悔も・・・反省も・・・してないッス」
つ

全く微塵たりとも。

「兄ちゃん・・・やっぱり兄ちゃんだったんだね」

「季衣・・・俺は・・・俺は・・・」

「兄ちゃん！　いいんだよ兄ちゃん」

ヒシッと抱き着いてくる季衣。

「何？　この寸劇？　って春蘭アナタ・・・泣いてるの？」

「グスッ・・・泣いでません」

「姉者は可愛いな」

曹操さん達を尻目に。

「季衣~~~~」

「兄ちゃん~~~~ん」

暫くコントは続き

「政成は何時ものことだが白蓮殿も許緒もノリが良いことだ」

星が締めた。

第五幕のような様子！（後書き）

後書き

気付いたらネコミミ軍師が出てなかった！
ええネコミミ軍師は次回ということで。

次回もまたお暇なれば覗いてやって下さい。

感想などありましたれば是非！

第六幕のような様子! (前書き)

前書き

久々にコチラ今回もまたご都合連発、特に後半。

それでも大丈夫という方はどうぞ。

第六幕のような様子!

スツタラスツタラと曹操の正確には曹操ンとこの軍の案内で曹操さん家を目指しているとなんかやたらとネコミミフードを被った人に絡まれとります。

やれ汚らわしいだのやれケダモノだの・・・仕舞いには妊娠させられるだの更には完全アウトな台詞もちらほらと、しかしマサさんは紳士です。

『ガスッ!!』

「うきゅッ!!」

『ドサリ』

優しく寝かしつけて上げました、きつとストレスが溜まってたんだらうね。

「けっ桂花ッ!! マサナリ アナタ何して」

「イラッときたマサさん結構短気だから、それに女の子がそんなことをみだりに言っちゃいけません! 完全にアウトな台詞を吐きくさりやがったからな、季衣の教育に悪い」

若干本音がヌルリと出た。

「ボクそこまで子供じゃないんだけど」

いやさ実際はそうやもしれんが何となく？下手したら俺よか年上の可能性が・・・いやなんかその辺触れると大変なことになりそうなんでスルーで。

「あっちなみに・・・ネコミミフード君、暫くは起きないんで」

「ハア~~~~アナタ責任もって運びなさい」

「あいよッ」

ヒョイツと小わきに抱えます、まっ目が覚めたらまたコチャコチャ言われそうだがそんな時やそんな時だな、多分再び眠っていたかどうかろうけど。

「ジーーーーー」

ふむ・・・

「季衣、肩車するか？」

「うん!!」

トントンと肩に駆け上がる季衣で

「エヘヘ」

ナイススマイル。

「ジーーーーー」

「星君や？ オマエもか？」

「ふむ出来れば・・・しかし場所がないな」

いやさ片手空いとりますがな、ちなみに俺が持ち歩いてた簡易式の小屋は季衣の村に置いてます、つか上げました、まっ必要になったらまた作れや・・・

「むっ・・・コレなら」

ってオイ星君や何故に正面に回る？

『ガシッ』

「フッ・・・コレなら政成の手を煩わせることもないだろ」

コアラかよ？ 星コアラ？

「どうだ政成、更には私の胸の感触も十分に堪能」

「おやすみ」

『ゴスンッ!!』

「めふんッ!!」

頭突きをお見舞いしました、でぐんにゃり星を『何時も』のように小わきにセツッ。

「なんでコイツは懲りないんだ？」

「アレだからじゃね？」

「ああ、なるほど」

白蓮さんからも完全にアレ扱いの星さんです。

「何かしら・・・アナ達を見てたら何か疼くものが・・・でもその衝動に負けたら凄く苦労する気が・・・」

ふむ曹操さんツツコミたい衝動にかられてるようだな。

「曹操・・・暫くマサを任せる・・・そろそろ私も休みが欲しい・・・」

「イヤよ」

そのやり取り何回かされてます、だからこそ。

「まっ頑張れよ？」

グッとナイススマイルでサムズ。

「人事かよッ!!」

「人事なのッ!!」

息ピッタリですがな。

「兄ちゃんももうちょっと抑えようよ」

それが出来たら苦労しねえよ、ツツコミの人が。

「っとそだった夏侯惇さんや そっちんヤツってオマエんこと姉者とかつってたけど妹なん？」

「秋蘭かそうだ！」

ふむ・・・やっぱし妹さんだったか。

「夏侯淵だ・・・先程はイキナリ矢を射てすまなかったな」

ほう夏侯淵な、秋蘭ってなあ多分、真名だな、っと。

「アレはあのツンデレが悪い」

曹操を指差す。

「秋蘭」

「ハッ！」

『シュバッ』

射られた。

『ガシッ！』

「むはむは（無駄無駄）！」

むろんキャッチしたけどね歯でだけど両手が塞がってたしね。

「チツ・・・」

「プツ・・・舌打ちすんなつうに 全く そんなんだから何時まで立っても髪の毛のドリルが回転しないんだ」

「どりるって何よ！ っていうか私の髪は回転しないわよ！」

むっ・・・残念。

「回転したら面白えのに・・・」

「別にそんな変な面白さなんていらないわ」

残念、実に残念。

「むっこの近距離で放った矢を止められるとは・・・しかも歯で・・・少し落ち込むぞ・・・」

「マサナリィィ！ 秋蘭が落ち込んだらどうしてくれるんだ！！」

ふむ落ち込んだ時にはコレ、皆の味方。

「ミ〇ミ〇飲め」

「なっなんだコレ・・・飲み物なのか？」

ミ〇ミ〇を進める度に大体はこんなリアクション、けど飲んだら。

「中々だ」

好評なのさ!!

「兄ちゃんボクも」

「ほれ」

季衣にも上げる、つか皆に上げる、軍の人達までは行き届かねえけど。

「不思議な飲み物ね? けど中々美味しいわ」

「マサナリもつとくれ!」

うむうむ、ミ○ミ○の力は偉大なり、つか夏侯惇よ・・・オマエ・
・・・。

「わかってるな! ほれ飲め! やれ飲めドンドン飲め!」

ガンガン与えました。

「鬼島殿・・・余り姉者に物を与えないでくれクセになるだろ」

夏侯淵に怒られた、つか。

「鬼島殿はやめれ! マサかマサナリな鬼人も止めろよ」

「ふむ・・・ではマサナリと」

うむうむ、それでよし、つかこの手の類のやり取りってめっさや

ってるな、まっコレからもありそうな気がすつけど。

「もっとくれ」

「「ダメ!!」」

「何故だ！ 秋蘭まで一緒になって!!」

「クセになるからだと・・・まっ俺としても上げてもらっただけな後になさい」

「ええい！ 今飲みたいのだ今!!」

夏侯惇・・・気持ちはわからんでもないが・・・なんつうか・・・うん、ここでまた上げたら本格的にダメな子になってしまいそうな気がする。

「我慢しろッ！ コレ以上駄々こねたらお尻ペンペンするよ!」

「むっむう~~~~後で絶対寄越せよ!!」

全く・・・。

「手間のかかるやつちゃ」

「そこが姉者の可愛い所ではないか」

まあわからんでもないけど、手間のかかる子程ってヤツか。

「春蘭・・・恥を晒して・・・」

「まあなんだ・・・うん・・・大丈夫だって曹操 私のところはアイツだぞ？ それに比べれば・・・なっ？」

「アレと比べられてもねーハア」

別にため息つかんでも・・・まっ慣れてるけど。

夏侯惇は気付いてないけどな。

とこんな感じでコチャコチャありながらも曹操さん家・・・つか街に到着、まっ途中でネコミミフードや星を二度寝したりしたけど。

「結構栄えてんのな」

「自慢の街よ」

ふむ、曹操が自慢したがるのもわからんでもない。

「おっ肉まん売ってんじゃん買ってこよ」

「後になさい食事は城でするんでしょ」

まっ確かにそうなんだが、肉まんの10個や20個くれえでメシが入らなくなるなんつことはないわけよ・・・と思ったがここは素直に従うかね。

「じゃ早速突撃 曹操さん家の晩御飯!!」
「まだそれ言ってるんだね兄ちゃん・・・」

うん暫く引っ張るつもりだしな。

「孫策のところでやる気か？」

「当然だ！」

まっまだ先になっだろうけどな。

「とりあえずついてらっしゃい案内するわ」

「あいあい」

と曹操さんに案内されて着いた場所は・・・。

「何故に広場？ 宴会的な感じか？」

「食事の前の運動よ」

『ヒュッ』

あらま曹操、また鎌を取り出してからに。

「まっ別にいいけどな？ 季衣つうわだから下りれ」

「うん！」

『ヒュッスタッ』

結構身軽な季衣です、っと。

「星とネコミミフードは・・・その辺に転がすか？」

「あっ兄ちゃんボクが運ぶよ」

「じゃ頼むわ」

ヒョイと二人を担ぐ季衣、鉄球使いだけあって力も結構あるやな。

「準備はいいかしら」

『ゴキゴキン』

曹操の言葉にクビを回しつつ指を鳴らし。

「いいぜい踊ろうか姫さん？」

「似合わないわよッ!!」

『ヒュン』

放たれた鎌の一撃をヒョイとスウェーしかわす。

「フッ」

『クンッ! ギュルッ!』

手首を捻り鎌の方向を変えて足元を狙う曹操。

『グンッ』

あえて内側に入る。

「チッ！」

近すぎて鎌が振るえない曹操は舌打ちしつつもバックステップで距離をとろうするが。

『ヒュッ』

曹操の足の間に俺を右足を出し膝の裏に引っ掻け阻止。

「このッ離れなさいッ！」

足をかけられてない方の足で膝蹴りを撃つ曹操君。

「残念それ悪手だわ」

足が浮いた瞬間を狙い、肩に手を置き、グンと押す、片足のしかもその足も引っ掛けられてる曹操は当然、地面に。

『ドサッ』

となるわけです、で右足は曹操の左足にかけたまま膝で左足も押さ、左足の膝で鎌を持ってる右手を押さえる、右手は左手って感じ。

ちなみにこの間一秒足らず。

で左手の指でわっか作って。

『バチンッ』

デコピン！

「ッ！！」

そこそこの痛さです。

「一本！！　　ってことで？」

「そうみたいね・・・何も出来なかったわ・・・」

グッと曹操の手を掴んで立ち上がらせつつ。

「まあ精進したまえ」

曹操の頭を撫で撫で。

「だからなんで頭を・・・言っても無駄そうね」

もちろんですとも、撫で王目指してますからね。

その後、当然のように夏侯惇に。

「マサナリイイイ華淋様になんてことをしてるウウウ！！」

てな具合に斬りかかれたがヒョイツとかわし。

『ギチギチギチ』

グランドコブラ。

「ぎぶっぎぶっ~~~~」

今回はわりと早くギブってくれました。

「春蘭・・・手合わせ頼んだのは私よ・・・全く」

「アホの子だけど真っ直ぐでいいじゃんかアホの子だけど」

「二回アホって言ったわね」

大事な事だからね。

「私はアホの子ではな~~~~い!!」

「はいはいミ〇ミ〇あげるから落ち着け」

「むっ・・・うむ美味しいな」

既にさっきのこと忘れてるらしい、この辺が実にアホの子だ、ま
っミ〇ミ〇の力もあるだろうけど。

「姉者はホントに可愛いな」

まあ確かにここまでアホの子だと逆に可愛く思えてくるよな。

美味そうにミ〇ミ〇飲んでる姿とかマジに可愛いッス。

「曹操 夏侯惇くれ」

「ダメよ」

やっぱしダメだったか。

「当たり前だろマサ」

白蓮さんに呆れ顔でコラッてされつつも。

「それじゃそろそろ食事にしましょう」

やっとこ目的の晩御飯です。

あつ星とネコミミフードはもう目が覚めてるぞ、相変わらずネコミミフードがうるせえから寝かしつけようか迷ったが今回は我慢した、俺偉い。

「しっかり手は出てるけどね兄ちゃん」

はい季衣の言う通り気絶しないくらいの威力でゲンコはしました、反省も後悔もしてねえですけどね。

「つかネコミミフードよオマエさんなんで俺に突っ掛かってくるわけ？」

「そんな名前じゃないわよ っていうか話しかけないで汚らわしい」

「桂花 一応客人よ名前くらいは名乗りなさい」

「うっ・・・はっはい華琳様・・・ジュンイクよ」

ジュンイク・・・ね。

「何故に片仮名」

「知らないわよ！」

知らないらしい・・・皆も深くはツツコむなよマサさんとの約束だ。

まっホントは漢字が出ないだけなんですけどね、とかメタな事はその辺りに置いといて。

「でジュンイクさんや何故に突っ掛かってくんの？」

「男なんて野蛮で嫌らしい生き物が気にいらないのよ！」

はぁ・・・ようするに。

「男嫌いってヤツね・・・」

「後バカそうだし教養がないヤツも最低よ」

なっなんだと・・・。

「バカじゃないわアアア！　ちよつと勉強が苦手なだけで決してバカじゃねえ！！」

「ハン！ どうだか？」

むっム力つく・・・。

「まあマサは確かにあんまり頭良さそうに見えないしな」

「白蓮さーん　そういうことは本人を前にして言うことじゃなくね！
」？」

「あっ悪いつい」

くっ・・・クソウ・・・このままでは完全にバカ扱いではないか。

「まあいいではないか政成はそれで多少頭が弱くてもお釣りが来る
ほどの良い男だぞ」

「うんうん兄ちゃんは優しいし強いし面白いし大丈夫だよ兄ちゃん
ならバカでもやってけるよ！」

いやさ・・・星・・・季衣・・・。

「喜ぶべきか落ち込むべきか・・・それが問題だ・・・」

「複雑ね」

複雑ですとも。

「まっいいわ今はメシ」

「切り替え早いわね」

それが俺ってもんですからな。

「バカにありがちよね」

「曹操さんアイツまた寝かしつけていいッスか？」

「ダメよ」

チツ・・・残念。

「ハハハ人の事をアホ扱いしておきながら自分も似たようなものだとはなマサナリ」

「 72×181125 は？」

「うっ・・・秋蘭!!」

「姉者・・・私に頼るな」

フツ・・・勝った・・・。

「ちなみに答えは1171な？」

「「「・・・」」」

ってオイ・・・皆さん何その意外も意外みたいな反応。

「いくら勉強が苦手でもこんくらいの計算くらい暗算で出来るわ！

！　　「どんだけバカだと思ってるの！！」

XとかYとか出てきたらアレだけど。

「今のは見なかったことにしましょう」

「そうですね華琳様」

「そうした方がいいな」

「心に毒ですからな」

「うんボクも何も見なかったし聞こえなかったよ」

アレ・・・ちょッアレ？　　何そのアレな感じ、なんかものっそもやもやするんですけど。

「まあアレだマサナリ・・・慣れないことはするものではないということだな・・・」

夏侯淵に肩をポンとされて慰められた。

「わかった答えは13528だ！！」

全然違うぞ夏侯惇・・・まっいいけどね・・・チクソウ・・・。

・ ・ ・ ・

「結構美味えな」

もやもやを乗り越えてもっさもっさと晩メシ中。

「この酒もまた格別・・・どうだ政成？」

「だから俺ア未成年だから酒を飲まねえつつうに・・・あっ季衣口ん横にタレついてる」

「えっ兄ちゃんどこ？　ここ？」

「ベタだなぁ逆だ逆　ホレ」

「むくくありがとう兄ちゃん」

どう致しまして。

「むっ！！政成　口についてるぞ私が舐めとって」

「懲りろオマエは」

「相変わらず固いぞ政成」

オマエがアホなだけだと思う。

「ハハ・・・悪いな騒がしくて」

「そのわりには楽しそうじゃない公賛孫」

「わりとな？」

まっメシは楽しく食うのが美味さの秘訣ですからな。

「マサナリ・・・オマエの作った・・・アレ・・・なんていう名前だ？」

「芋天ぷらか？」

「うむ　それが食いたい」

ふむ・・・別にいいっちゃいいが。

「後にしろ厨房まで案内したら作ってやるよ」

「絶対だぞ！」

「おう！」

って・・・そうだ。

「いいか曹操く？」

一応は許可を取っとくか。

「構わないわそのかわり私にも馳走しなさい」

「おけ！」

「華琳様！　あんな男の作ったものなど口にしては」

「気になるものは自分で確かめないと気がすまないわ」

カク相変わらず目の敵だな・・・曹操はわかってるな。

「姉者 マサナリの作った料理は美味しいのか？」

「美味いぞ 秋蘭も一緒に食べよう」

「ふむ・・・いいかマサナリ？」

「よかよか」

とこんな感じでメシの最中に食い物の話をするつつうなんかアレな感じながらも曹操さん家の晩御飯は終了して、食後のまったりミ
○○○タイム。

「そういや星 オマエさんの知り合いがいるんだろ会ったんか？」

「会ったぞ急がしそうなのでアイサツだけだが元気そうだったな」

ほう、そいつア重畳。

「鬼人と居ると言ったら驚いてたぞ？」

「その二つ名どうにかならんかね」

「諦めろって広まったもんは仕方ないって」

広めた本人がそれを言うかね白蓮君。

「マサナリ芋天ぷら!!」

メシ食ったばっかなのにもう食いたくなったらしい。

「はいよッ! ほれ案内しれ」

と夏侯惇に案内されて厨房へ行きサクサクと作って。

「ほらよついでにカリントウも作ってみた」

「あっバカ!」

あっ白蓮よバカとはなんだバカと。

『ビュンッ』

「おわッ! 何すんだコラ曹操!!」

「マサナリ・・・真名を許した覚えはないわよ」

はあ? ってあっ!! 曹操の真名は華琳・・・で今、俺が言ったのはカリントウ・・・。

「オマエの真名を言ったわけじゃねえつうに! この菓子の名前がカリントウつう名前なんだわ」

急いで誤解だと言う。

「かりんとう・・・ねえ・・・嘘じゃないわよね？」

「違いつうに・・・でも・・・まあ・・・アレだ・・・迂闊すぎた悪い！」

曹操に頭を下げる。

「ふん・・・華琳様・・・こんな男は処刑です処刑！ 華琳様の真名を勝手に言うなんて」

「スマン！！」

ひたすら頭を下げる。

「曹操許してやってくれマサはちよつとワケありで常識に疎いところがあるんだよ」

「ワケあり？」

「ああ マサはなカクカクシカジカってワケなんだ」

「なるほどね・・・それなら仕方ないわね・・・今後は気をつけなさいマサナリ」

許してくれるらしい。

「氣ィつけるなるだけ、スマンかった」

今後もうっかりがあるかもしれんが気をつけよう。

『ヒヨイ・・・パクッ』

「へえ〜中々美味しいじゃないこの　かりんとうってお菓子・・・
作り方を教えなさいそれで許してあげるわ」

「おうッ!!　　つとこの天ぷらも美味えぞ」

「モグ・・・確かに中々ね」

うむ・・・曹操の中々はそこそこに美味いと脳内変換。

「白蓮も悪いな庇ってもらって」

「気をつけろよ」

「そうだよ兄ちゃんヒヤヒヤしたよ」

「今後も似たようなことがありそうだな注意しないとな」

いやホント申し訳ねえッス。

「モグモグ・・・マサナリお代わり」

「速えよ食いきるの!!」

「フッ・・・姉者の氣遣いだ」

だろうな、夏侯惇アホの子だけど良い奴だわホントは怒ってんだ
ろうに。

「何度も言うが気をつけろよ」

「なるたけ」

「フン・・・命拾いしたわね」

全くです、いやさまあ死ぬつもりはないわけだけんど。

とにかく今後はなるたけ気をつけようと思いながらも、曹操さん家の晩御飯・・・つうか曹操さん家で夜食は終了したのでした。

第六幕のような様子! (後書き)

後書き

こんな感じになりました。

そしてジュンイクさん漢字が出ねえッス。

他にも出ない人居るだろうな〜。

第七幕のような様子! (前書き)

前書き

ええ、今回も色々とアレな感じです。

第七幕のような様子!

曹操 視点

「ぎぶうゝゝゝぎぶうゝゝゝッ!」

今日も春蘭の負けを認める声が響いている。

「じゃ今日も俺の勝ちな?」

「クウゝゝゝ今日は勝ちを譲ってやる、今日は!!」

毎日負けてるじゃない・・・。

マサナリが来てからもう毎日の用に春蘭はマサナリと手合わせをしている、まあアレは手合わせというより喧嘩に近いのだけど。

鬼島 政成・・・通称、鬼人、本人はこの二つ名は嫌がってるけど、その強さはまさに鬼、春蘭の武は私達の中でも最強と言ってもいい、その春蘭を、子供・・・いえ赤子扱いね。

「まっ喧嘩は買いだ、かかってこんかい、っと飲むか?」

「飲むぞ!!」

あの二人、結構相性が良いみたいでああやって、確か、ミ〇ミ〇と言ったかしら? っていう飲み物を飲んでる時は、昔からの友人

のようだ。

まっマサナリは、誰に対しても物おじをしないし、あのような感じなのだけど。

「おっ？ 曹操じゃん、オマエも飲むか？」

「マサナリ！！ 華琳様に向かって、その口の聞き方は止めろと言ってるだろ！！ 何度言ったらわかる！！」

「何度言ってもわかりませうん？」

そう・・・誰に対しても、この私に対してもだ。

「いいのよ、春蘭、マサナリに何を言っても無駄だわ、公孫賛も言ってたでしょ疲れるだけよ」

「うむ、そういう事だよ、わかったかね？ 夏侯惇君」

アナタが胸を張るのは間違ってるわよマサナリ？ まあいいけど言っても疲れるだけだもの。

「あっ、マサナリ、私もミ〇ミ〇頂くわ」

「あいあい」

マサナリからミ〇ミ〇を貰って飲む、やっぱり結構美味しい。

春蘭なんかは、マサナリにしょっちゅう要求している。

マサナリは、秋蘭に、あまり春蘭に物を与えるな、と言われて以来、自重してる・・・と見せ掛けて、秋蘭の目を盗んで与えたりしてる。

まあある程度は自重してるから煩く言うつもりはないけど。

「兄ちゃん!!」

「おっ季衣、どうした？　つか季衣も飲むか？」

「飲む!!」

季衣はマサナリにベツタリだ、確か季衣の村に来ていた盗賊をマサナリが一人で倒した・・・というよりも埋めた？　まあ退治した事からマサナリに真名を許してると聞いた。

ちなみに私が真名で呼んでいるのは彼女を私の軍にむかえいれたから。

春蘭が一合だけ撃ちあったと言い、興味が出たから春蘭と手合わせをさせてみたら、かなりの武を持っているとわかったからだ。

季衣の村も私がシツカリと見ると約束し、彼女も、それを受け入れた。

「兄ちゃん!!」

「おっ季衣、どうした？　つか季衣も飲むか？」

「飲む!!」

相変わらずマサナリにベツタリね、確か季衣の村に来ていた盗賊をマサナリが一人で倒した・・・というよりも埋めた？ まあ退治した事からマサナリに真名を許してると聞いた。

ちなみに私が真名で呼んでいるのは彼女を私の軍にむかえいれたから。

春蘭が一合だけ撃ちあったと言い、興味が出たから春蘭と手合わせをさせてみたら、かなりの武を持っているとわかったからだ。

季衣の村も私がシツカリと見ると約束し、彼女も、それを受け入れた。

今は親衛隊として私に仕えている。

「あっ！ かつ華琳様、春蘭様!! すすすいません!!」

私達がいること今、気付いたみたいね、それだけマサナリを慕っているということかしら？

「気にすることはないわ」

「華琳様は寛大だからな!!」

私達の言葉に申し訳なさそうな顔をしながらも、どこかホツとしたような顔をする。

「夏侯惇君、俺と季衣の扱い違くな？ 俺ン時ア、あんだけ、うるせえくせに、差別じゃね？」

「差別ではない区別だッ！！」

春蘭の言葉に心底驚いた顔をするマサナリ。

「そ・・・曹操・・・マズイッス、夏侯惇が差別と区別を使い分けたぞ・・・」

「ええ・・・マズイわね」

まさか使い分ける事が出来るなんて・・・驚いたわ。

「華琳様アア！！ 私だってそれくらい分かります！！ っていうかマサナリイイ、オマエ、何時まで私をアホ扱いする気だアア！！」

「飽きるまで」

「コノオオオ！！」

あっ・・・また始まったわね？ 私もからかったのが原因だけど。

「よっと！！」

「のわーーーーッ！！」

一本背負い・・・だったかしら？ 今の技。

『ギチギチギチ』

「協固め・・・だったかな？」

確かそんな名前だったわね、あの技。

「ぎぶ~~~~ぎぶ~~~~!!」

案の定、春蘭がギブアップ・・・参ったって意味だったかしら？
して勝負は片が付いた。

「んで、季衣、なんぞ用でもあったんじゃないの？」

涙目で痛そうに腕を摩る春蘭の頭を撫でながらマサナリは季衣に
そう話を振る。

「えっと、また兄ちゃんの話が聞きたいなあって」

「おう？ 昔話か？ いいぜい」

昔話・・・ねえ。

「天の国の話・・・興味あるわね」

「天の国ちゃうちゅうんじゃ、日本ね日本別世界の更には未来の」
そうだったわね。

「で、マサナリ、今日はどの話だ？ 妖怪変化を倒す話か？」

春蘭もマサナリの昔話とやらを度々聞いてるようね、子供のよう
に目を輝かせてるわね。

「ふむ・・・ではでは、『しっぺい太郎』つう話だ・・・むかし、
むかしの話、つってもコツチじゃ昔って程じゃねえかも知れないけ
どな」

そう前置きをしてからマサナリは話を始めた。

「ある所の旅の坊さんが、ある村に立ち寄った時の出来事、今日は
この村に泊めて貰おうと思い、村の人に話かけたんだと、で話しか
けてみたら、村の人達の様子が妙におかしい」

中々、雰囲気あるわね、不思議と引き込まれるわ。

「何か、よそよそしい・・・いや違う、何かに怯えている？ そん
なような雰囲気だった、そして一様に、この村から早く出た方がい
いと言い出した、坊さんは何があったのかと村の人達に聞いて回っ
てみた」

なるほど・・・春蘭の希望に沿う話になりそうね。

「そして、その村の中でも一際大きな屋敷を見かけその家でも話を
聞いてみようと中に入ろうとしたらある事に気がついた・・・その
屋敷の門の前には白羽の矢が刺さってんだわ・・・って白羽の矢っ
て聞いた事あるか？」

「あるわよ、白羽の矢が立ったのソレでしょ？」

「それぞれ、コッチでも通じんだな？ 横文字は通じねえのに、不思議なこって」

横文字ね・・・マサナリのいた所で使われてる言葉ね、私もいくつかは教えてもらったわね。

「兄ちゃん続き続き！！」

「そうだ早く話せ！！」

「悪い悪い」

話しを続きを促され、ポンポンと二人の頭に手を置き謝りながらも話の続きを始める。

「でな、その屋敷の主人に話を聞いた所、屋敷の主人の一人娘が人身御供に選ばれてしまったんだと、坊さんは人身御供とはどういうことだ？ と聞いたら

その村の北の方にある山に住むという神様が、毎年、若い娘を人身御供として差し出せと言ってきたらしい。

差し出さなければ禍を齎すって脅してな？ 実際、差し出さなかった時は村の畑は荒らされ、大変な被害が出たらしい」

「なんだと！！ そのような神が居てたまるかッ！！ ええーい私

が斬ってくれるッ！」

「春蘭様、ボクもお供します!!」

春蘭、季衣・・・入り込みすぎね、そんな二人を見てマサナリなどこか嬉しそうな顔で。

「だよなあ、俺がその場にいたら即効でブツ飛ばしに行ってるね！
！ 神だろうがなんだろうがボツコボコにしたらあ!!」

神を・・・ねえ？ しそうねマサナリは。

「うんうん、流石は私が見込んだだけはあるな!! よしコレからは真名で呼んでいいぞ!!」

「いいのか？」

「私がいいと言ってるんだ構わん！」

「おけ、じゃ改めて、春蘭な」

「う・・・うむ」

へえ、まさか春蘭が真名を預けるなんて・・・というか、そんな軽い理由で真名を・・・。

「華琳様・・・実は春蘭様、前々から兄ちゃんに真名を預けようと思ってたんです、ただきっかけがなかったみたいで」

小声で季衣がそう教えてくれた、なるほどね、春蘭もマサナリの事は気にいってるとは思ってたけど。

私もマサナリには真名を預けてもいいかしら？　とは思ってはい
るけど。

私に対してココまで対等・・・というより友人・・・かしら？
として接してくる人物なんて、特に男では珍しいもの。

「曹操ンとここに来てから秋蘭に続いて二人目だな？」

「へっ？」

マサナリのその言葉に春蘭がマヌケな声が上げる、秋蘭・・・い
つの間にマサナリに真名を預けたのかしら。

「マサナリイイイ！！　　どういことだ！！何故、秋蘭の真名を！
！」

「ええーい落ち着け春蘭、昨日だ昨日、手合わせン後にな？」

「むう・・・私がアレだけ悩んでたというのに・・・なんだ・・・
なんかモヤモヤする」

春蘭・・・ふうん、相当、マサナリの事を気にいつてるのね。

「そんな時には甘い物、食うか、カリントウ？」

「食べるぞ！！！」

「ボクも！！！」

「私も頂くわ」

以前はこのお菓子の名前で一悶着あったけど、美味しいのよね、このお菓子、この街の名物として広げようかしら。

パリポリと音を立て、カリントウを味わいつつ。

「で、話の続きは？」

続きを促す。

「つと、そうだったな、えっと・・・人身御供のそこだったよな？
で、坊さんも春蘭みたく・・・まっ春蘭程、勇ましくはねえが、
ワシがその神の正体を見極めてやる！！と言ったんだと」

「そっそうか？ 勇ましいか？ フフ・・・」

マサナリの勇ましいという言葉に照れる春蘭、武人としては嬉しいでしょうけど女としては正直どうかしら？ まあ喜んでるみたいだし、愛らしいけど。

「で、坊さんは、その神が住むつう北の山へ行った、北の山には祠があつてな？ そこにはボロボロになった着物・・・服な？ が散乱してたらしい、坊さんはますます怪しんで、その祠近くにあった洞窟に身を潜めてジーツと夜まで待った・・・。

そして夜になる何処からか太鼓を叩く音が聞こえてきた・・・」

アレだけ横道にそれてたのに話し始めたらまた一気に引き込まれる。

春蘭や季衣も、そうみたいね、コレも一種の才能かしら。

「どんつくてんつくすってんてん・・・そう太鼓の音が大きくなると共に、ズシンズシンと地鳴りがする。」

ザワザワと森の木々がざわめいた、坊さんが恐ろしい寒気と戦う中、地鳴りは大きくなり、太鼓の音、そしてその太鼓の音に合わせて歌声が響いてきた。

その声は低く唸るような、人間が出すような声じゃない、ますます坊さんは恐ろしくなった、そりゃそうだ、いくら坊さんとはいえ人間だからな。

でも坊さんは勇気を振り絞って洞窟の陰からそっと顔を出しのぞき見た、すると・・・」

「「ゴクリ」」

春蘭と季衣が唾を飲み込む音が聞こえる。

「真っ白な体をした巨大な猿がいた、その回りを囲むように小さな・・・と言っても人間くらいの大きさがあったみたいだけどな？ 黒い猿がいた、明らかに妖怪変化の類」

その猿達は、その場所で太鼓を叩きながら、踊り歌いだした。

どんつくてんつくすってんてん♪ この事だけは知らせるな♪

丹波の国には知らせるな♪

しっぺい太郎に知らせるな♪

どんつくてんつくすってん♪

ひとしきり踊り歌い終わると猿達はズシンズシンと消えていった」

しっぺい太郎・・・この話の名前ね？ てっきり、その、お坊さんの名前かと思っていたけど。

「猿達が立ち去った後、坊さんは震えながらも、やはり神様なんかではなかったと確信し、その事を村の人達に伝えたと、ワシだけでは退治が出来ない、だから、丹波の国に行って、しっぺい太郎を探してくる、人身御供がされる日までには帰ってくる」と村を後にした」

「むっ、その坊さんが倒すんじゃないのか？ やはり私が！！」

「まっ春蘭の気持ちもわからんでもないが続きを聞きなされ」

「うっ・・・うむ」

唸る春蘭の頭を撫でるマサナリ、やっぱり、マサナリどこか嬉しそうね、春蘭も撫でられるのがまんざらでもないみたいだし。

そんな春蘭を見て、羨ましそうにしてる季衣。

「ほれ」

「エヘヘ」

それに気付いたのか季衣の頭を撫でるマサナリ、って私を見てる

わね？

「私はいいわよ・・・ってコラやめなさい」

結局、私も撫でられた、マサナリいわく撫でたくなったからだ！
！ 撫で王は撫で撫でしたい衝動には勝てないのだ！！ ってわけ
のわからない事を言ってたわ。

まあそれなりに心地良かったのは否定しないけど。

「つと・・・で丹波の国に着いた坊さんは早速しっぺい太郎を探し
始めた、けどいくら探しても見つからず、村の娘が人身御供になる
日が迫ってきた。

坊さんは途方にくれる坊さんだったが、その時、しっぺい太郎の
事を知っているという人から話を聞いた、そして人から、しっぺ
い太郎のいる場所を聞き、その場所へと行き、しっぺい太郎やゝゝ
い、と、しっぺい太郎を呼んだ。

すると、ビュウと風が吹き、坊さんは思わず目をつぶった、坊さ
んが目を開けるとそこには、大きな大きな犬がいて、ジーツと坊さ
んを眺めていた」

犬？ まさか、その犬が・・・。

「曹操は気付いたみたいですか？ そっ、その犬が、しっぺい太郎
だったんさ、しっぺい太郎は人じゃなくて犬だったわけだ、道理で
見つからないわけだわな？」

「ふえゝ犬だったなんてわかるわけないよ兄ちゃん」

「坊さんもそう思ったと思うぞ、で、坊さんは、その犬に事情を話してみた」

「犬に言葉が通じるのか？」

春蘭の言う事も最もね・・・ってコレはお伽話の類でしょうに、そんな事を聞いたら話として成立しない・・・。

「俺は何となくだが話せるが？」

予想の斜め上に行くわねマサナリ・・・春蘭と季衣は目を丸くしてる・・・私はツツコムと疲れそうだから流すけど。

「まっ俺ンこたあ置いておいてだ、多分、坊さんはしっぺい太郎に不思議なもんを感じだんじゃね？ 犬とは思えないくれえにデカかったらしいしな、で、坊さんの話をジツと聞いてた、太郎はコクンと頷き坊さんを背中に乗せて風のように走り出した」

もしかした、しっぺい太郎は神獣の類だったのかも知れないわね。

この大陸にもそのような神獣や妖怪の話はあるものね。

「あっという間に村へと着いた坊さんは太郎に村の外で待ってるように伝えると早速、屋敷へと行き、屋敷の主人に話し、娘が使うはずだった人身御供の箱を借りて、再び村の外へと出た。

すると待っているように伝えたはずの太郎がいない、どうしたのかとクビを捻っていたらビュウと風が吹き同時に太郎も戻ってきた、その口には何処から持ってきたのか一振りの立派な刀があった。

坊さんはその刀を握り、箱を持ち、太郎に跨がると、あの猿達が住む北の山へと向かった」

どうやら話は佳境みたいね。

「北の山の祠で、箱の中に入り、夜も待つ坊さんと太郎・・・って坊さんはまだしも太郎はどうやって箱の中に入ったんだろうとかそういうのはアレだから無しの方向で」

ガクツと力が抜ける、急にそんな事を言うのはどうかと思うわよ。

「いやさ気になったかなあと？」

「ええーい、その事より話の続きだ！続き！！」

「そだな、でだ、ジーツと待っているとあの太鼓の音が聞こえてきた、太郎がいるとはいえやはり恐ろしさもあった坊さんだけど、グツと刀を握ると不思議と怖さは亡くなっていった・・・」

どんつくてんつくすってんてん♪

どんつくてんつくすってんてん♪

どんどん太鼓の音が大きくなり、あの歌が聞こえてくる。

どんつくてんつくすってんてん♪

この事だけは知らせるな♪

丹波の国には知らせるな♪

しっぺい太郎に知らせるな♪

どんつくてんつくすってんてん♪

坊さんと太郎が潜んでいる箱の回りを踊り回り、歌が止むと・・・グツと箱の蓋が開けられた!!

その瞬間、太郎が飛び出し、箱を開けた黒い猿に噛みつく、続くように坊さんも飛び出して、刀を振るった。

ギャーギャーと慌てる猿達、そんな猿達を太郎と坊さんは次々と打ち倒し、残るは巨大な白い猿だけとなった」

「妖怪の大将だな!! それでどうなったんだ!?!」

目を輝かせて続きを促す春蘭、フフ・・・ホントに愛らしいわね。

「白い猿に腕に噛み付く太郎、その太郎を振りほどこうと暴れる猿の腕を坊さんは切り落とし、痛みでのたうち回る猿の喉に太郎が食らい付く、なおをも暴れる猿に坊さんは止めな一撃を放った!!」
ズズーン・・・巨体が地面に沈む・・・そして猿は動かなくなった・・・」

「うむ、見事だ! まあ私だったら一太刀で決めていたがな!!」

張り合ってどうするの。

「兄ちゃんだったら、すぐにやつつけられるかな？」

「フッ・・・当然だ」

でしょうね。

「つと、続き続き・・・そして猿は退治され、しっぺい太郎は国へと帰り、坊さんは、村に猿は退治された事を伝えと、村に住んでくれと頭を下げられ、村に住む事になった、そして村の人達と幸せに暮らしましたとき、めでたし、めでたし」

『パチパチパチ』

自然と拍手が出る、横道に逸れたりはしたけど。

「中々に面白かったわ」

「そいつあよかった」

「次の話は！！」

「春蘭君や一辺に話しちまうとネタが無くなっちまうだろうに、つうわけで今度な？　ってそうだった！！」

ン？　何かしら？

そうクビを傾げてる私にマサナリは。

「ぼちぼち、孫策さんの顔を見に行こつかなあと思ってるんだが」
そろそろこの街を出ると言ってきた・・・。

・ ・ ・ ・

マサ視点

「えっ・・・兄ちゃん・・・行っちゃうの？」

おう・・・季衣・・・めっさ泣きそうな顔、連れて行きたいが、
そうもイカンしな・・・。

「ダメだ！！ 私が勝つまでは何処かに行くのは許さんぞ！！」

いやさ春蘭さんや・・・そうは言ってもなあ・・・。

「元からそのつもりだったしなあ？ つか負ける気は全然ねえしな
あ」

ちなみに既に、白蓮と星には話しています。

「まっ、直ぐに行くってわけじゃねえし、また会えるさね」

「うう・・・兄ちゃん・・・ココに居ようよ～～」

「そうだ、オマエだったら将として良い働きが出来るだろ！！」

「そうね・・・どうかしら私の所に来ない？ はっきり言って私は

アナタの事を気にいつているわ、端的に言つてマサナリ・・・アナタが欲しいわ」

おう？ 俺、スカウトされてる？ うむむ・・・その気持ちは嬉しいっちゃ嬉しいんだが・・・。

「待て待て待て曹操！！ マサは私の所のだ引き抜きはカンベンしてくれ」

おっ？ 白蓮さんいつの間？ まっ確かに今ンところは。

「白蓮さん家のマサナリ君なんでカンベン！！ 悪い、まっでも手を貸すくれえはするぜ？ 個人的に」

「そう・・・わかったわ・・・ただ・・・私はね、欲しいと思った物は必ず手に入れるわよ？」

まあまあ・・・それはなんつうか・・・らしいっちゃ、らしいな。

「フフ・・・覚悟なさい、そうね、コレからは真名で呼んでいいわ、私がアナタを手に入れるという決意の現れね」

「はあ・・・まあ今ンところ、その予定はねえけど、じゃ華琳と呼ぶからな」

「ええ」

と曹操の事も真名で呼ぶ事になりました、春蘭が突っ掛かってくるかと思つたが珍しく突っ掛かってこなかった、代わりに白蓮に。

「マサのヤツ・・・行く先、行く先で今みたいに引き抜きに会うんじゃないだろうな・・・」

って言われもうした。

まあそれはないような気が・・・ふむ・・・。

「どうだろ？」

「そうかもしれないわね？　まあ最後は私のもとに来る事になるでしょうけど」

「だからダメだってば、マサは私のだ!!」

いや、その言い方はなんかアレなんだが・・・つか、俺あ基本的には俺の物なんですが。

「ハッ!!　兄ちゃん、もし旅に出ちゃったとしたら槍を持ったチビに気をつけて!!」

「いやさ季衣・・・意味がわからん？」

「ボクだってわかんないけど、なんかビビッと来たんだよ!!　とにかく気をつけて!!」

どうやら電波的な物を受信したらしい、少し心配になった。

「フン、どうしても行くと言うのなら私を倒してみろ!!」

春蘭・・・。

「じゃ遠慮なく」

『メキメキメキ』

「ぐあゝゝぎぶゝゝゝぎぶゝゝゝ」

逆エビを決めてやりました。

「容赦ないよ兄ちゃん・・・」

「容赦ないわねマサナリ・・・」

「容赦ないなマサ・・・」

上から季衣、華琳、白蓮の順でした。

第七幕のような様子！（後書き）

後書き

殆どが昔話だった・・・。

そしてひそかに、曹操さん、夏侯惇さん、夏侯淵さんの真名を預けられたという回。

夏侯淵さん出て来てないけどね！！

そしてキャラがやっぱりグダグダ・・・コレからもグタっていくと思いますが、それでも大丈夫という方は次回も見てやって下さると嬉しいです。

感想などありましたら是非。

第八幕のような様子! (前書き)

前書き

もの凄く久々にコチラです。

かなり苦しい感じに・・・。

強い心を持ってどうぞ。

第八幕のような様子！

「ってワケで明日にでも、突撃孫策さん家の晩御飯を敢行する為に出発しよう思う」

もっさもっさと晩メシを食いながら少し前から考えてたコトを話す。

ちなみに今回の晩メシは俺も作りました。

「明日か、まああんまりのんびりし過ぎても幽州に帰るのが遅くなるしな、わかった」

「私も了解した」

白蓮、星にはアツサリと話が通った。

しかし。

「兄ちゃん、ホントに行っちゃうの？」

「ダメだ、ダメだ！！　まだ私がオマエに勝ってないだろうっ！！」

季衣に春蘭から、ちよつと待ったコール。

つか、キミらには前にも言ったような気がするんだが。

「まっまた遊びに来っからよ」

「その時は一人で来なさい、キッチリ懐柔してあげるわ」

「だから引き抜きはやめてくれって」

「いいじゃない、私が欲しいんですもの」

相変わらず郷田思考だな華琳よ。

「ふんっ、やっと汚らわしい男が消えて清々するわ」

そして相変わらず目の敵だな、ジュンイクよ。

ちょっとイラっとしたんで。

竹グシを額に刺しといた、後悔も反省もしてないホントならシャーシンがよかったんだがな。

って何故にシャーシン？

まっいいさね。

ちなみに何回かは刺してるんで、回りも特に騒いだりはしてないぞ。

最初に刺した時は、ザワってなったけど。

「ふゝむ、マサナリは明日には行ってしまうのか、残念だな」

「悪いな秋蘭」

と、こんな感じで晩メシを過ごし。

翌日・・・。

「じゃ行くべーか」

「ああ」

「うむ」

出発と相成ったワケだ。

「兄ちゃん・・・また絶対、会いに来てね、絶対だからね!!」

「おう!!」

「ぐうぐう、マサナリ!! オマエは私が倒すんだからなっ!!
いいな! 私以外に負けたら許さんぞっ!!」

「いや、俺、既にジジイに負けまくってんだが」

軽く四桁は負けてると思う、腹立つけど。

「それ以外だ!!」

「あいよ、まっ俺もジジイ以外に負けるつもりは更々ねえーし、つ

か春蘭にも負けるつもりはねえーけどな」

「なんだとー！ー！！　ならばココで」

「はいはい、今朝もやったばかりだろうに、ほれミ○ミ○飲むか？」

「飲むぞー！！　ンッン・・・美味しいな〜コレ」

いや〜ホントに春蘭は。

「姉者は可愛いな〜」

「だよな〜、なあ華琳やっぱ春蘭くれ」

「いいわよ」

何！？　まさかのOKだと！！

「アナタが私の元に来たらね」

「なんでえい、そういうことかい、つか冗談だつうに」

「あら、私は本気だけど？　なんなら秋蘭も一緒にいいわよ？」

オイオイオイ。

「却下で、つか流石にそれって、どうよ？」

ネタだつづくに、いや欲しいけど、特に春蘭は、マスコットのな意味で。

「別に私はいいぞ？ マサナリなら？」

「いやオマエも何、言ってんの秋蘭君？ 頭大丈夫？」

「いや何、マサナリがいると姉者が更に可愛くなるしな、ふむ・・・なんなら兄者と」

「秋蘭！！ おまつオマエはいきなり何を言い出すんだ！？ そ、そそそれではまるで私がマサナリとめ、め、め、夫婦になるみたいではないかつ！！」

夫婦ってオマエ、夫婦って。

「おっと、夏侯惇殿、残念ながら、その、ぼじしょん、は、この私が収まる予定」

「は、ないよ？ つかオマエも何、言ってんの？」

予定ってオマエ・・・星の予定表には何が刻まれてんのやら？」

「おや・・・知りたいのであれば、今晚にでもネットリ、ジックリ」

「指導!!」

『ガスッ!!』

「アダッ!!」

声に出てたらしい、つか何故に星はスキあれば、そっち関係に持
つていきたがんだろ。

ホントにアレなのだろうか？

「へこたれないな〜星姉ちゃんって・・・でも・・・兄ちゃんのお
嫁さんか〜エヘ〜」

季衣が何やら呟いてニヤニヤしだしたんだが・・・。

まあいいさね。

ちなみに季衣は、星と白蓮のことを真名で呼ぶようになってます。

「曹操様!!」

おう？ 考え事してたら、軍人Aが何やら曹操に報告しとる。

はて？ どごぞで盗賊でも現れたのか？

「わかったわ、秋蘭、季衣」

「はっ!!」

「はい!!」

ふむ・・・所々、話を聞けたが、どうやら村が襲われてるらしいな・・・。

どれ。

「はいはい!! 俺も行きてえ、チクツと暴りたい気分だよ」

「暴りたい気分って・・・もっと他の言い回しがあるでしょ?」

「じゃアレだ、世話になった分の宿代ってことで?」

「アレは私との賭けで・・・まっいいわ、それじゃあマサナリ、アナタも先行してちょうだい」

「おけっ!! つうわけで、白蓮、星、ちょっくら暴れてくるわ」

軽く右手を上げて二人に伝える。

「はぁ〜やっぱりか」

「まあマサナリだしな、厄介事が好きな御仁だ」

加えて面倒事もそれなりに好物です。

「兄ちゃんも一緒に行くの？　だったら百人力だよ！！」

「ノン、ノン、その万倍は強えぜえ？　俺あよ」

「フッ・・・頼もしい限りだな」

意外と頼りになると言われるタイプだからな。

っと・・・じゃあ。

『グッグッ』

屈伸。

「その村の場所は？」

「・・・アナタ、まさか走って行く気？　馬なら用意させるわよ」

「自分で走った方が早え、ほら、どっち？」

「走った方がって・・・」

「曹操、一応、言っておくけどアレ本気で言ってるからな」

「でしょうね・・・向こうよ」

華琳が指差す方向を確認。

「じゃ季衣、秋蘭、先に行って軽く撫でとくわ」

「うっうん」

「その軽くて終わりそうな気がするが、わかった、私達も急いで向かう」

じゃ急ぎますかねえ。

「よ～～～～い、ドンッ!!」

『ドンッ!!』

その襲われてる村に向けて走り出した。

・ ・ ・ ・

華琳 視点

「もう姿が見えないわね」

土煙りを上がったと思った瞬間、マサナリの姿は点になり、その点もあつという間に見えなくなった。

「ふあゝゝゝ兄ちゃん、速いゝゝゝ」

アレは速いとかで済むようなのじゃないわ。

まさに雷速・・・黒い稲妻といった感じね。

「しかし、心配ですな」

少しだけマサナリの足の速さに気をとられていると、趙雲が、小さくそう呟くのが聞こえた。

「何がかしら？」

短い期間ではあったけどマサナリの規格外・・・バグだったかしら？ は、ある程度はわかってるツモリ。

アレがたかが黄巾ごときに遅れをとるなんて考えられないと思うけど。

「賊に間違れないかと？」

賊に・・・。

趙雲の言葉に季衣がビクリと肩を震わせ、気まずそうな顔になった。

なるほどね・・・。

「間違えたのね？」

「うっ・・・はっはい、兄ちゃん達がボクの村に來た時に盜賊と間違つて攻撃しちゃつて・・・あつ、でも今は兄ちゃんのこと、そんな風に思つてないです！！ 兄ちゃん優しいし、面白いし、えと力ツコイイし、えとえと・・・うう～～」

パタパタと手を振りながら必死な顔の季衣。

確かにマサナリは・・・。

目つき悪いし上に、ガラが悪いというか・・・パツと見じゃそう思われる可能性もあるわよね。

フウ・・・ややこしいことになる前に。

「秋蘭、季衣、早くマサナリと合流なさい」

「ハッ！！」

「はっ、はい！！」

二人にそう指示を出すのだった。

・

・ ・ ・

マサ 視点

「だ〜か〜ら〜、盗賊でもなけりや、その黄巾？　　ってヤツらでもねえーつつてんだろうがっ！！」

「嘘をつくな！！」

「そや、黄巾やないとしても、あんさんのガラの悪さ、どう見ても盗賊とかの類やっ！！」

むっがあ〜〜〜わかってくれねえ〜。

あつ、どうも、とりあえず状況を説明しますわ。

ええ、ナイスダッシュで目的地へと向かい道を間違えるとか、そんなベタなことではなく、真っ直ぐ、多分、最短距離を駆けて来たわけだが。

目的地について、待ってたのは義勇軍つう村？　　を護る為にいた人達からのあらぬ疑いでした。

いやね、うん、季衣んところでも盗賊とかに間違われたけどね。

チクソウ・・・なんでやねんホント。

「待ってなの、もし本当に盗賊とかだったら、一人で来たりしないはずなの」

おうっ!?

軽く凹んでたら俺に詰め寄ってきてた三人組の一人が、そう言うてくれた。

うむうむ、わかってくれる人はわかってくれ・・・。

「何も考えんで突っ込んできたんやろ? コイツ頭悪そうやし」

イラッ!!

「誰が頭悪いんじゃボケエエ!! そりゃ勉強は苦手だけど、頭は悪くねえっの、マジ、ぶっ飛ばすぞゴラッ!!」

なんて失礼なコトを言いやがるんだ、この腐れ関西弁は。

「キサマ、本性を顕したなっ!!」

「本性も何もないわっボケ!! 大体初対面の人に頭悪そうとか言うか普通? どんだけ心に深い傷がつくと思ってるんだ!! まっ俺は言うけどねっ!!」

「言うんかいっ!!」

言う言いまくる、特に気に入らないヤツにはガリガリ言う。

「性根が腐ってるな」

「腐ってません新鮮ですうもうとれたて、もぎたて、フレッシュ一番搾りですう!!」

「なんや、ふれっしゅって? 意味がわからんわっ!!」

ノリじゃボケエエエ!!

「まあまあ、凧ちゃんも、真桜ちゃんも・・・えと、目つき悪い人も落ち着くの」

むっ・・・さっき擁護してくれた女の子・・・。

ふむ・・・仕方あるまい、ワンクッション置こう。

つか目つき悪い人って・・・いや目つき悪いけど、って名前知らねえーなら、しゃーねえーわな。

スウ~~~~ハア~~~~。

深呼吸。

うむ、多少は落ち着いた。

「で、目つきの悪い人、お名前を教えてほしいの、あっ沙和は于禁なの」

えと・・・沙和が真名で于禁が名前ってことか？

多分。

「何故、このように怪しい男の」

「凧ちゃん」

「わかった・・・楽進だ」

渋りながらも于禁に凧って言われてたほう、も名前を教えてください。

やっぱり凧が真名で楽進が名前・・・多分。

「はぁ~~~~しゃうないなあ・・・うちは李典や」

真桜言われてた関西弁が李典か、やっぱり真桜が真名・・・多分。

「じゃ俺ね、鬼島 政成、マサかマサナリでヨロシク」

俺も簡単に自己紹介。

「鬼島？ 政成？ どっからが字でどっからが名なんや？ せやけどなんや聞いたことある名前やな・・・」

このリアクションもお馴染みだな。

つか今だに字とか名とかがよくわからん。

「やはり名前からして怪し・・・ン？ 鬼島・・・政成・・・鬼島・・・政成・・・いついや・・・まさか・・・」

「凧ちゃん、顔が真っ青なの」

うん、于禁の言う通りに楽進の顔色がどんどん青色に染まってる。

コレはいい青さだな。

「き、聞き間違いかもしれないしな、うん、そういう可能性もある・・・ンン・・・あの、もう一度名前を名乗ってくれないか？」

「鬼島 政成ですが？ マサかマサナリでヨロシク」

再び自己紹介。

「なんや、凧？ 確かに変な名前やけど、最近はどう聞く名前やな

いか？ 鬼島 政な・・・ン！！？」

どうした李典まで。

「もしかして、噂の鬼人さんなの？」

「グッ・・・ホント順調に広まってんなオイ・・・ええ、そうですよ認めたくねえけど」

ホントどこまで広がる気だチクソウめ・・・。

「「おっ鬼人ーーーーッ!?!」」

楽進と李典のシャウトが空に響き渡りました。

・ ・ ・ ・

「いや、あの、本当、数々のご無礼、申し訳ありませんでした」

土下座せんばかりの勢いで謝りだす、楽進君。

「いや別にいいけどね・・・」

「風、マサの兄さんがそう言うてるんやから、もうええやん？　なあ兄さん」

「オマエは今だにちよつと腹立つ」

「なっなんでや!!」

あの頭悪い人、扱いはイラッとしたからだ。

「まあまあ鬼人さん、真桜ちゃんも悪気があったわけじゃないから許してほしいの」

「いや悪気がなけりゃあんな暴言は出てこんだろ？　後、鬼人って言うな」

「ああゝゝもう、悪かった言うてるやん、許したってやゝ」

「鬼人さんしつこいのゝ」

キッチンの油汚れ並にこびりつくから俺は。

つか・・・。

「いい加減、鬼人はやめれって」

「じゃ、うちのこと許してくれるんやな？」

むっ？　しょーんなかな。

「わあった、わあった、水に流すから、だから于禁は鬼人言うな、マサかマサナリだ」

「わかったの、マサさん」

よしよし。

さて・・・。

「楽進よ、オマエ、いつまで頭下げてんの？　もういい、つってんじゃない」

「あっ、はっはい」

「後、さっきに比べて口調堅い」

ええ、なんか急に改まって敬語使い出したんですね、この子。

「そっそれは、その鬼人様のご活躍、お聞きし、一度、お目にかかりたいと思っていました、その・・・」

はい？　なんじゃいそりゃ？

と俺がクビを捻ってたら李典が。

「凧は鬼人・・・まっ兄さんのことやな、に憧れとってん」

ホワッツ？

「なしてよ？」

「幽州に始まり、盗賊、山賊などに苦しめられている民をその手で助けているお人、まさに善鬼、素晴らしきお方です！！」

うわっ・・・何それ怖い・・・。

つか何それ？　つか誰それ？

「うんうん、そうやなく、今や鬼人は悪人には恐怖の、民には救いの対象やで」

「そうなの、マサさんは救いの鬼なの」

うつうつむ・・・。

「なんか根本的なところが間違ってる気がする・・・俺にとっちゃ売られた喧嘩を買っただけだし、気に入らないヤツ潰してるだけなんスけど」

わんぱく坊主、別名、悪ガキ的な思考で動いてるだけなんだが・・・。

俺がそう言ったにもかかわらず、楽進君はその言葉を謙遜と取っ

たのか、キラキラとした瞳で見られました。

なんかスゲエ居心地悪いッス・・・。

「で、マサの兄さんは、何しにこの村に来たん？」

「ン？ 一暴れしに」

「それじゃわからないの」

むっ、そりゃそうか。

「いやね、ちよいさっきまで華琳・・・あつ、曹操ね？ ンとここにいたんだけど、村が襲われてるって聞いてな？ 軽々運動でもしよかと」

そう言った途端、楽進君の瞳のキラキラ具合が一段、増した気がしたが、とりあえずスルー。

「つてのことは援軍が来るっちゅうことなん？」

楽進については李典もスルーするようです。

「おう、来るぜ、後からな、俺は先行してやって来たけど」

「なるほど、いち早く民を救おうとした為に一人突出してしまった

わけですねっ!!」

楽進はスルーで。

「うーん・・・それじゃあ、その援軍が来るまで、なんとか持ちこたえるの、とりあえず門を作るところから始めるの」

于禁も楽進をスルーしつつ、方針を決める。

「よしや、ンじゃ働くとするかねえ」

「なんや兄さん、戦闘だけじゃなくて大工仕事もこなせるんかいな？」

「得意分野だぜえ」

と、こうして、まずは門を作ることから始めることに・・・。

まっその前に。

「うう・・・全く相手にしてもらえない・・・」

と泣きが入り始めた楽進を慰めることになったんですけどねっ!!

第八幕のような様子！（後書き）

後書き

いっぱい、いっぱいだ・・・クツ・・・やはり無謀だったんだ・・・。

どんどん追いつめられてきてる気がしますが、次回も頑張ってくださいと思いますので、更新の際はヨロシクお願いします。

感想などありましたら是非。

第九幕のような様子! (前書き)

前書き

戦闘描写のアレっぷりは相変わらず。

でも頑張りましたので心を強く持ってどうぞ!!

第九幕のような様子！

「やり過ぎたな・・・」

「うんコレはやり過ぎやろ・・・」

あつども、門&防柵作りに励んでた鬼島の政成です。

ええ何をやり過ぎたか？

うん、カンの良い人なればわかるよな。

「コレどこの宮殿入り口やねん」

李典君の言う通り、特に門のどこ上ん部分なんて、別に付けなくてもいいのに、鳳凰の置物的なモノまで設置してまいりました。

しかも紐を引くと羽ばたく動きをする無駄な懲りよう。

「怖いものだな若さ故の過ちって・・・」

「いや過ち言う程のことやないやろ？ まあやり過ぎやけど・・・せやけどマサの兄さん、このカラクリほんま凄いで、後で作り方教えてな？」

「ン？ うっすら気付いてたけどやっぱこういうん好きなん？」

門とか作ってる間、李典もノリノリだったし。

「うん、めっちゃ好きやで、うち、が使ってる武器もカラクリ仕込んでるし、見てみる？」

「おう興味あるわ」

「じゃちょっと待っててな」

と李典が武器を取りに行き持ってきた武器はなんと……。

「どや、うちの螺旋……」

「ドリルだと！？」

「えっ？ ど、どりる？」

ドリル型の槍だった。

実にドリル、まさにドリル、素晴らしいまでにドリル。

「あのコレ螺旋槍言うやけど……」

「いやさ、そこはドリルランスに改名するべきだ」

「どりる……なあ、確かにどりるって語感的に引かれるもんがあるなあ、よしや、ほんなら、うちの槍は今日から、どりるらんすや、敵を貫くどりるらんすやー！ー！！」

ああ実に素晴らしきかなドリルという響き。

まさにロマンが詰まっています。

「うう・・・羨ましい、鬼人様とあんなに・・・」

「風ちゃん、まずは鬼人様って言うことから止めるの、マサさん鬼人って言われるの好きじゃないみたいなの」

「わっわかった」

と、そんな感じのやり取りがありつつも敵さんが結構近くまで迫って来てるらしいと話を受けて俺も矢倉の上に上り確認。

ふむん・・・。

「どうですか政成殿？ 見えますか？」

「見える見える三千ちよいってとこ」

そこそこな数が集まってるみてえです。

あっちなみに今、俺にそう聞いてきたんは楽進な？

鬼人言うんはやめてくれたが殿付けをしだした、でそれに関しては止めてはくれんらしい。

最初は様だったから大分マシだけど。

「三千・・・政成殿がお作りになっ防壁のおかげで暫くは持つでしょうが長期になると厳しいですね」

「凧ちゃん後から援軍が来てくれるの忘れてるの」

「そうだったな、それまで持ちこたることが出来れば・・・」

なんか難しい顔してますなあ楽進君は。

「よっと」

『スタッ』

矢倉から飛び降り着地。

そこへ李典が。

「なあマサの兄さんマサ兄さんやったら賊の三千や五千パーつとやれるんちゃうん？」

軽い調子で聞いてきました。

「ぶっちゃけその百倍いても足りんぜ俺とやり合うにはよ？」

なので俺も軽い調子で答えます。

まあ実際百倍でも全然足りんな。

「いやうち冗談の積もりやったんやけど・・・」

「さっ流石は噂に名高い鬼人様！！　なんとも頼もしきお言葉！！」

「鬼人言うなっちゅうに」

「今のは流してあげて欲しいの」

敵が迫ってるのに結構、暢気な俺達です。

そんな中、季衣&秋蘭組の到着。

門を見た二人に。

「兄ちゃんやり過ぎだと思う」

「この村の名物にでもなりそうだな」

とのツツコミをいただきました。

反省は少しした、だが後悔はしない。

で二人を交えて改めて作戦会議。

別名、軍義。

議長は秋蘭さん、副議長は楽進でお送りします。

で主に作戦を考えるのが于禁君、どうやら軍師的なポジションらしい。

その于禁の考えにドンドンと自分の意見を言うのが李典。

で俺と季衣は・・・。

「なんか俺達いらん子じゃね？」

「うん、役割がないよ兄ちゃん」

残念なポジションを担当する形になってしまいました。

だが言っておく決して頭が悪くて会議に参加出来ないわけではないぞ！！

ただ折角上手くいってる会議を邪魔するのはアレかなっていう紳士として当然の気遣いを発揮しただけだからホントに信じれ！！

「つうわけで俺達は隅っこの方でアッチ向いてホイでもしてよか？」

「何がどういいうわけでかはわかんないけど流石にダメだよ兄ちゃん」

ダメでした。

チクソウちよっとくはいノってくれても良いのに。

でもホントにやったら流石に秋蘭にコラッてされただろうから季衣はナイスな判断だと言える。

「マサの兄さん落ち着きないなあ〜何もすることなくとも大人しくしとき、まだ許緒のほうが落ち着きあるで？」

秋蘭じゃなくて李典にコラッてされた。

クッなんだろオマエだってきつとコツチ側よりのポジションのはずなのにっ!!

「ヘン良いもん良いもん、オマエらが頑張って作戦考えてる間にサクッと潰してきて会議の意味ごとぶっ潰してやる!!」

半ばヤケクソ気味に会議場を飛び出し盗んだバイクで走り出さんばかりの勢いで黄巾（八つ当たり対象）とやらに突っ込んで行く俺だった。

・ ・ ・ ・

秋蘭 視点

飛び出して行った政成に一瞬呆気にとられてる私達。

「政成は本気だと思うか？」

この中では政成と一番に付き合いが長い季衣にそう問う。

「やと思います兄ちゃんなら」

間髪入れずに答えが返ってきた。

確かに政成ならやるような気がする。

しかもアッサリと。

姉者以上に頭に血が上りやすいな。

いや流石の姉者も一人で、それも会議で仲間外れのような扱いを受けたからという残念な理由で突っ込んだりはしない・・・と思うが。

はつきりしないと

言えないのが姉者のカワイイ所だと思う。

もうホントに姉者はカワイイからな。

見ててあれほどに・・・。

「あの夏侯淵様？」

ハッしまった!!

つい軽い現実逃避を。

「ふむ・・・とりあえず政成を連れ戻して来ないとな」

「そうですね、ほんま、あの兄さん仕事複雑に何考えてんのやろ？」

「きっと何も考えてないの〜」

「何を言う沙和、きっとアレは演技だ私達が気負わないようにするための、いやそれどころか政成殿は、この村に被害が及ばないよう本当に一人で賊を討ちにいったのやも」

「呟〜それは流石にないやろ？」

「美化しすぎなの〜」

確かにかなり美化してるよう聞こえるが・・・。

「もしかしたら兄ちゃんならホントにそうかもしれない」

季衣がポツリと呟いた言葉。

私を含めて一斉に季衣を見ると季衣は多少驚きながらも政成に出会った時と季衣の村であったことを話だした。

「・・・ってことがあつて、だから兄ちゃんならあり得るかなあつて兄ちゃん変なところで優しいから」

その話を聞いた楽進は

「聞いただろ二人共！！　やはりあのお方は素晴らしいお方だ」

相当に心酔してるようだな。

「ほんま兄さんはようわからん人やなあ」

「アレが演技だったら相当の役者なの」

確かにアレは私にも本気に見えたのだが。

ホントによくわからないヤツだな政成という男は。

・ ・ ・ ・

マサ 視点

「なんか微妙に勘違いされてるような気がする」

なんか知らんが楽進と季衣辺りが中心になって。

「一人で飛び出して来やがったと思ったら何わけわかんねーこと
言ってたんだテメエ」

「頭がおかしくなったんじゃないの」

「違いねえこの数に一人で向かってくるとか完全にイカれてるとし
か思えねえや」

イラッ。

「誰がイカれてるだボケが、そりゃ頭のネジが外れてるたあ言わた
ことはあっけどイカれてねえわっカス共が!!」

「「「なんだとテメエ!!」」」

ああーうるせえ一斉に怒鳴るなっつうのサラウンドどころじゃね
えんだから。

つとイカンな別に俺はお喋りしに来たわけじゃなかったわな。

『ゴキゴキン!!』

目的を思い出しクビを回しながら指を鳴らす。

「おめでどうテメエらはめでたく俺の八つ当たり対象になりました、覚悟を決めて潰されちまって下せえね？」

ヌタリと笑いながら先頭のボケにダッシュし。

「ウオラアア!!」

『ゴガッ!!』

右ストレート。

後ろのヤツらを巻き込みながら吹き飛ぶのを軽く横目で見ながら
続けて横にいたヤツに飛び後ろ回し蹴り。

コレまた上手く巻き込んで数を減らす黄巾のヤツら。

「なっなんだコイツはっ!!」

「あり得ねえ人間があんなに飛ぶとかあり得ねえだろっ!!」

おっ慌ててきたか。

まっ残念ながら。

「あり得るんだなあコレがよお!!」

喚いてたヤツの胸ぐらを掴みブンと空へと放り投げる。

『キラッ』

星にしました。

大気圏で燃え尽きただろうけど。

そこへ槍を突き出される。

避けても良いが久々にやっところと思っただ。

「素手バリアアア!!」

そんな久々でもねえーか？

いやでも結構久々か？

軽くどうでも良いことを考えてる間も、槍の犯人を掴み地面に叩き付ける。

『グシャリ』

という音、それなりに加減はしたよ？

じゃねえーと地面が割れてまうし？

ヒビは入ったけど。

「やっ槍が・・・まっまさかアイツ噂の」

「鬼人!!」

「嘘だろアレは与太話じゃねえーのかよっ!!」

「だったらアレはなんなんだよ!!」

おう・・・どうやらコイツらも噂とやらを知ってたらしい。
つか

「鬼人言うんじゃねえー!!」

「「「ギャー!!」」」

めんど・・・ゲフンゲフン、イラッとか重なったんで一気に殲滅
しました。

ホント描写が思い浮かばなかったとかじゃなくてイラッとか重な
ったからだからっ!!

ホントだから信じれ。

なんか恒例になりつつあんなコレ。

一瞬そう思いつつもその考えも、そおーい、して帰還。

「はい、ただいま」

「兄ちゃん!!」

「政成!!」

「政成殿!!」

「マサの兄さん!!」

「マサさん!!」

ビックリ気味なりアクションが返ってきました。

「結局思い直して戻って来たんだね兄ちゃん」

「うんにゃキツチリ暴れてきたぞ、ダッハハ、コレでこの会議の意
味は無くなったわダッハハハ!!」

ざまあーみろ、会議の意味をグシャットしてやったわ!!

「はっ？　ちよっ兄さん、それマジか！？」

「マジじゃブツハツハ意味のない会議ご苦労さんダツハツハハハ！
」

俺を除け者にするからじゃワツハハハ。

高笑いする俺を見ながら一応は部下に確認させる秋蘭。

で、俺が言ってることがホントだとわかると。

「賊とは言え三千の敵を半刻もたたずに・・・コレが鬼人・政成の
全力ということか」

かなり驚愕しとりますな。

が、しかし秋蘭君や。

「全然全力じゃねえーッス、全力で暴れたらこの一帯が灰塵と化す
ぜ？」

地球がパカッてイクからねっ。

てんやわんやじゃ済まないことになりますぜ。

俺のその一言に皆さんドン引き。

まあ楽進は妙にキラキラした目で見てたけども。

その視線は止めれ焦げてまうから。

「ほんま、とんでもない兄さんやな、こうやって話しとる限りはちよつと頭が弱い兄さんやのに」

「李典君やオマエは後で裏に來い個人的に話がある」

「えっ・・・兄さん・・・アカンて戦いで火照った身体をうちで慰める」

「指導!!」

『ガスンッ!!』

ゲンコです。

「アタッ!! 何すんのや、ちよつとした冗談やないか」

「アホか冗談にしても季衣の前ですんな教育に悪いだろボケがつ!!」

「全くもう、そういう所から乱れた若者とかが出てきちまうんだぞ!!」

「兄ちゃんだからボクそこまで子供じゃ」

「季衣は黙ってなさいっ!!」

「あっゴメン兄ちゃん、って何でボク謝ってるんだろ？」

それは知らん。

って・・・オイ。

「秋蘭さんや何をひっそり服を脱ごうとしてやがりますか？」

「慰めないのか？」

「せんわポケッ指導!!」

『ガスン!!』

秋蘭は油断をすると被せてくる特にこの手のネタに。

陳留、あつ華琳のどこね？　に居るときもよく星の後に被せてきてたからな。

その後に春蘭が真っ赤な顔で。

『何をやってるか政成ー！ー!!』

と斬りかかってきやがるんだけども。

でもある意味、ツツコミと思わなくもない。

迎撃はするけど。

「わっ私は、そのような経験はありませんが頑張ります」

「頑張らんで良いからな楽進君よ、つかオマエもノルな指導!」

『ガスン!!』

ンなに真っ赤になってまでボケることもねえーだろうにっ。

「マサさん八面六臂の活躍ツツコミなの」

かつてはツツコミだったからね。

でも、どちらかという今はボケたい。

ツツコミがいるならば!!

白蓮さんの重要性を改めて感じた瞬間であった。

『私はやっぱりツツコミだけかっ!?!』

ナイスツツコミ白蓮。

第九幕のような様子! (後書き)

後書き

なんかザックリしてるなあ。

そんな感じの九幕でした。

ではまた次回!!

いつになるかはアレですが・・・。

感想などありましたれば是非!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6549m/>

来る時代（とこ）間違え・・・でも・・・いやどうだろう？

2011年8月16日16時26分発行